

# 吉志部瓦窯跡－出土瓦整理報告書－

平成24(2012)年3月31日

吹田市教育委員会

## 序 文

吹田市内には現在 149 カ所の遺跡が確認されていますが、その半数以上を占めるのが、千里丘陵に展開する古墳時代の須恵器窯跡であり、我が国有数の窯業地帯でした。

古墳時代の終わりとともに須恵器の生産は終息していきましたが、この窯業地帯としての伝統を引き継ぐと共に千里丘陵の良質な粘土を使用して、新たに、聖武朝難波宮の瓦を生産した七尾瓦窯跡や平安宮の瓦を生産した吉志部瓦窯跡で大規模な瓦の生産が行れ、古代窯業史上において重要な役割を果たしてきました。

今回、報告いたします吉志部瓦窯跡は七尾瓦窯跡とともに宮都造営に関わる官瓦窯としての性格を有し、わが国の古代の造宮体制を考える上で、非常に重要な遺跡であることから、国の史跡に指定され、瓦窯跡の所在する一帯は多くの歴史的な遺産と共に豊かな自然環境を有する「紫金山公園」として市民の皆様方に親しんでいただいております。

本書は吉志部瓦窯跡の調査等で出土した瓦の調査成果をまとめたものです。本書により本市を代表する遺跡である吉志部瓦窯跡の調査成果をより多くの方にご覧いただき、文化財保護のための一助となれば幸いです。

最後になりますが、調査にあたってご指導・ご協力をいただきました関係機関や地元の方々をはじめとする多くの方々に感謝申し上げます。

平成24(2012)年3月31日

吹田市教育委員会

教育長 西川俊孝

## 例　言

1. 本書は吉志部瓦窯跡において平成 19（2007）年度に実施した史跡吉志部瓦窯跡整備に伴う確認調査（紫金山公園整備に伴う通算 5 次調査）で出土した瓦の報告であり、併せて、昭和 46（1971）年、昭和 47（1972）年に実施した史跡整備工事において確認された瓦について報告する。窯跡等の確認調査の概要は平成 22（2010）年度に吹田市建設緑化部及び吹田市教育委員会によって「紫金山公園整備に伴う埋蔵文化財調査報告書 2」として刊行し、本報告の図版編を平成 22（2010）年度に刊行した。
2. 整理作業は吹田市立博物館（吹田市岸部北 4 丁目 10-1）において実施し、資料の保管も同所において行なっている。
3. 資料整理は調査員花崎晶子が主として担当し、本書の執筆は博物館文化財保護係増田真木が行なった。
4. 遺物番号は図、写真図版とも統一した。図版編の瓦の縮尺は軒瓦については 1/4、丸・平瓦は 1/5 とした。
5. 資料整理及び報告書の刊行に当たっては、下記の方々及び機関等からご指導、ご協力いただくとともに、大阪府教育委員会には所蔵資料の掲載許可をいただきました。記して感謝申し上げます。  
堀江門也、三宅正浩、大阪府教育委員会文化財保護課、宗教法人吉志部神社（順不同、敬称略）
6. 資料整理には以下の方々の参加を得た。  
秋山芳恵、小川里美、木船安紀子、佐藤健太郎、高井明美、林裕子

# 目 次

## 第1章 吉志部瓦窯跡の概要

1. 吉志部瓦窯跡の立地等.....	1
2. 吉志部瓦窯跡の調査.....	2
3. 平成19（2007）年度の確認調査.....	7

## 第2章 出土瓦

1. 出土状況.....	14
2. 軒丸瓦.....	14
3. 軒平瓦.....	21
4. 丸瓦.....	23
5. 平瓦.....	28
6. 面戸瓦.....	34
7. 緑釉点滴瓦、窯道具、その他.....	34
8. 記号のある瓦.....	36
第3章 まとめ.....	36

## 挿 図 目 次

第1図 位置図.....	1
第2図 H 1号窯・N 1号窯実測図.....	3
第3図 吉志部瓦窯跡調査地点.....	4
第4図 平成19年度調査地点平面図.....	6
第5図 調査区平面図.....	8
第6図 H 4号窯実測図.....	9
第7図 H 5号窯実測図.....	10
第8図 N 2・N 4号窯実測図.....	11
第9図 軒丸瓦接合模式図.....	16
第10図 平瓦寸法分布図.....	30
第11図 平瓦凸面縄目タタキ.....	32
第12図 窯道具実測図.....	35
第13図 軒瓦.....	37
第14図 平瓦.....	40
第15図 平瓦凸面縄目タタキ・平瓦凹面布目分布図.....	41

## 写 真

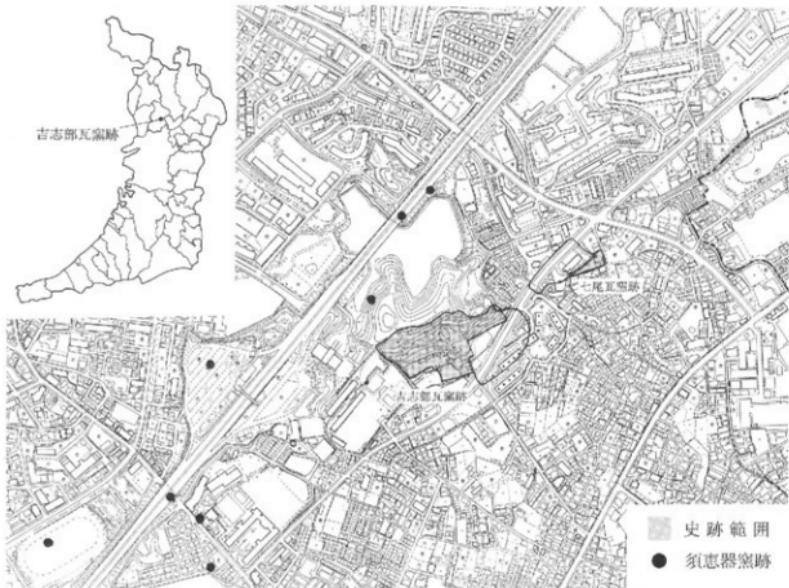
1 軒丸瓦接合痕.....	17
2 軒丸瓦接合状況.....	18
3 軒丸瓦接合状況 2 .....	19
4 軒丸瓦調整状況.....	20
5 軒丸瓦調整状況 2・軒平瓦凸面布目.....	22
6 丸瓦細部.....	24
7 丸瓦細部 2 .....	27
8 平瓦細部.....	31
9 平瓦凸面縄目タタキ.....	33

## 第1章 吉志部瓦窯跡の概要

### 1. 吉志部瓦窯跡の立地等

吉志部瓦窯跡は吹田市岸部北4丁目の「紫金山」と呼ばれる千里丘陵東南端の支丘陵の南斜面に所在する。「紫金山」は佐井寺集落の東部を基点として東南に向かって標高40m前後で伸び、平野に突出する部分で北東に屈曲して釈迦ヶ池の南を東へ伸びる。瓦窯跡は東へ伸びる標高40m、比高約20mの丘陵南斜面の中腹に構築されている。この丘陵東端、吉志部瓦窯跡の東方約200mの地点の北斜面及び東斜面には聖武朝難波宮の造宮瓦窯である七尾瓦窯跡が所在し、同一丘陵上に聖武朝と桓武朝の造宮瓦窯が展開している。

千里丘陵一帯は古墳時代後期には須恵器の生産地帯として大規模な操業が行われたが、紫金山丘陵一帯も釈迦ヶ池を中心に窯跡が展開し、市域では最も東に位置する支群である。一帯の窯跡は名神高速道路の工事等において一部の窯跡が調査されたが、10基以上の窯が存在したものと考えられ、時期的には6世紀中葉から後半にかけてのものであり、市域における生産が最盛期を迎える時期のものである。須恵器生産については、千里ニュータウン造成時に遺物が採取された吹田須恵器窯跡NO.9は7世紀末～8世紀初めの操業が考えられるが、全体としては7世紀前半には急激に衰退していき、その操業を終了したと考えられる(吹田市史編纂委員会



第1図 位置図 (S=1:10,000)

1981)。

奈良時代には丘陵東南部において聖武朝難波宮の造宮瓦窯である七尾瓦窯が操業しており、昭和54(1979)年の調査で窯窓6基(北斜面)と平窓1基(東斜面)が確認された。

当地一帯の良質な原料粘土の存在という地質的な条件や古墳時代の須恵器生産の技術的な背景が七尾瓦窯の操業の開始やその後、約60年を経た吉志部瓦窯の操業の開始においても大きな要因の一つであったであろうと考えられる。このように七尾瓦窯と吉志部瓦窯の操業は難波宮や平安宮という国家による大規模な造営事業にともなう官営工房が同一地域に営まれるという、他の窯業地帯に対して特色のある地域であり、当地一帯の古代を考える上で重要な問題を示唆しているといえる。

また、丘陵の南側には淀川、安威川へ流下する小河川が形成した微高地が広がり、沖積平野へと続いていくが、吉志部瓦窯跡の南東約1kmに展開する吹田操車場遺跡では平成12(2000)年から本格的に発掘調査が実施され、古墳時代から飛鳥・奈良時代にかけての粘土採掘坑と考えられる群集土坑、七尾瓦窯跡や吉志部瓦窯跡と同范の軒丸瓦も確認されており、丘陵部の須恵器窯跡群や瓦窯跡との関連が注目される((財)大阪府文化財センター 2008、2010)。

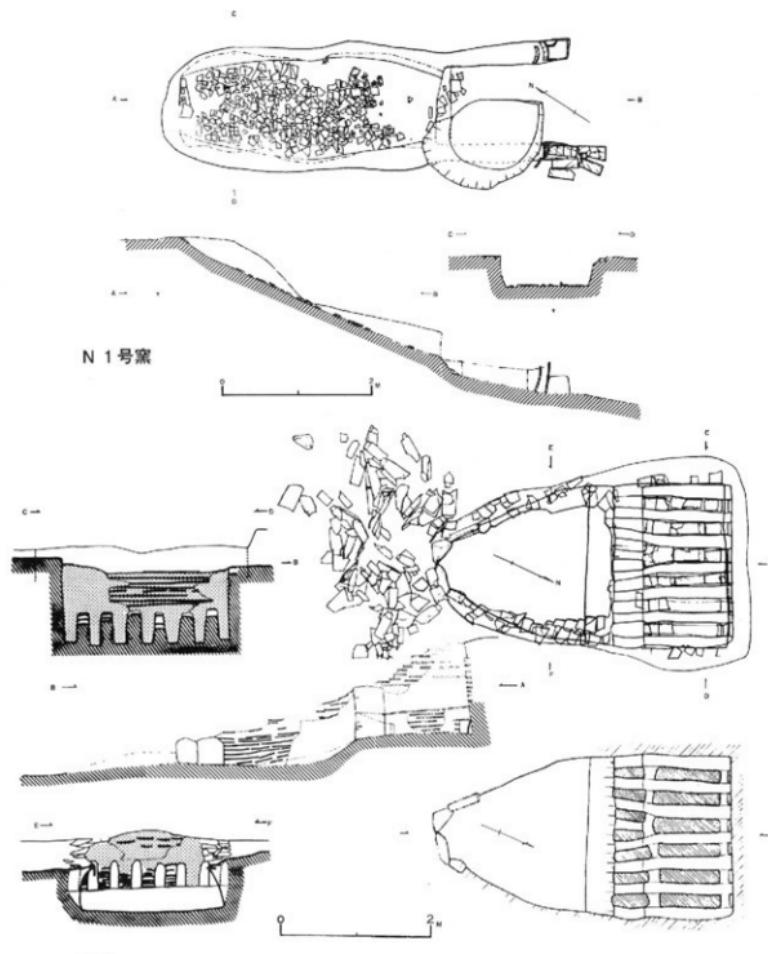
## 2. 吉志部瓦窯跡の調査

吉志部神社本殿付近の境内地から瓦が出土することは古くから知られていたようであり、昭和3(1928)年に神社西北隅から縁軸平瓦片が採集されたことが天坊幸彦氏によって報告され、昭和8(1933)年9月には大阪府教育委員会によって窯窓の1基が調査され、その成果の一部が新聞報道された。

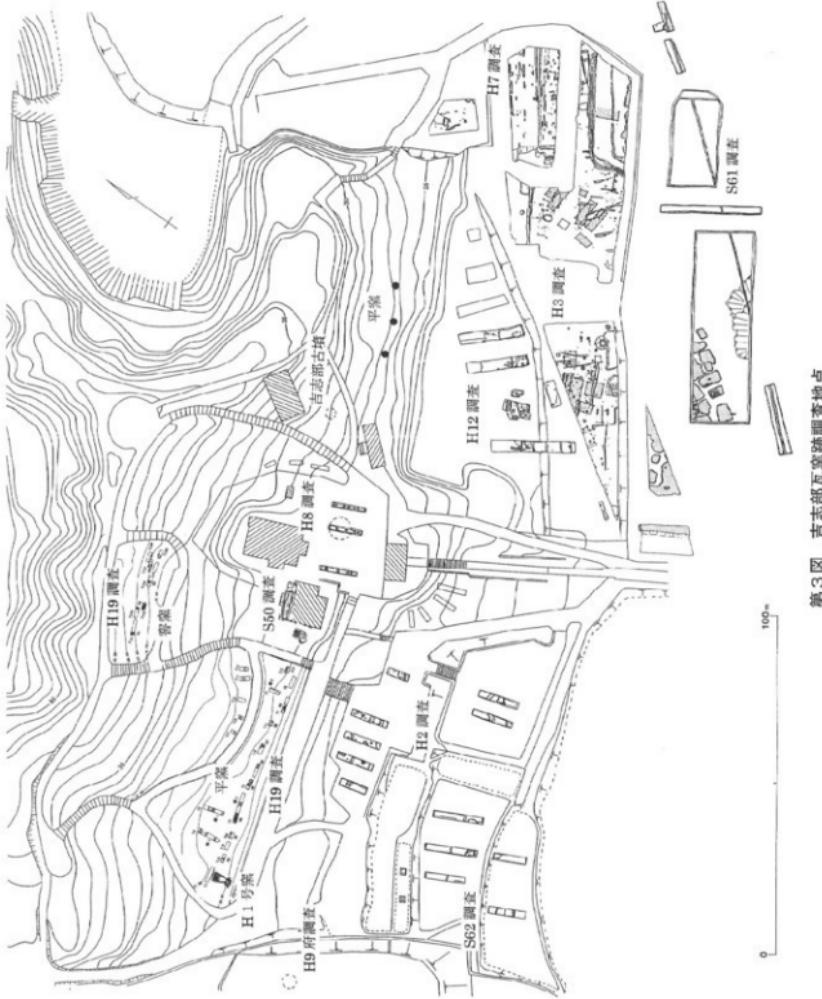
昭和16(1941)年に藤澤一夫氏は吉志部瓦窯跡が平安宮の造営瓦窯である可能性を指摘し、吉志部瓦窯跡について初めて歴史的位置づけがなされた(藤澤一夫1941)。昭和38(1963)年には鍋島敏也氏が丘陵一帯の踏査により6基の瓦窯跡の存在を確認し、その内、土取穴に露出していた瓦窯の観察により有牀構造の平窓であることを確認した(鍋島敏也1964)。

昭和42(1967)年に藤澤氏は昭和8年の調査や鍋島氏の報告を受けて、瓦窯構造の検討を行なうとともに、出土した瓦から吉志部瓦窯跡が平安宮の造営瓦窯であることを明らかにした(藤澤一夫1967)。

その後、窯跡の保存対策をたてるために昭和43(1968)年に大阪府教育委員会によって初の本格的な発掘調査が実施された。調査は平窓2基、窯窓2基及び平窓群の背後を走る排水溝が発掘されると共に一帯の測量調査及びボーリング調査により、平窓9基、窯窓4基の計13基の窯跡の存在が確認された。確認された瓦窯の内、H1号窯は半地下式有牀式平窓で、全長3.88m、焼成室は幅2.2m、奥行1.16mの長方形をなし、床には半截平瓦と粘土を交互に積み上げた6条の分焰牀が築かれる。燃焼室との間には瓦と粘土を積み上げた隔壁があり、その下端には8条の分煙孔が穿たれるが、この内2孔が1孔に合流して焰道へつながる。また分焰牀には2ヶ所に通焰孔が穿たれている。焼成室床の焚口は花崗岩を左右に配したものである。



第2図 H 1号窯・N 1号窯実測図(大阪府教育委員会「岸部瓦窯跡発掘調査概報」より転載)



第3図 吉志部瓦窯跡調査地点

H 6号窯は西半部のみ調査であったが、構造はH 1号窯とほぼ同一のもので、平窯は規格性の高いものであることが示された。ただし、H 6号窯では焚口の西側に接して平面逆三角形の簡易な窓状遺構が確認され、H 6号窯と同時に使用され、施釉陶器の第一次焼成に使用された可能性が考えられた。N 1号窯は全長5.22～5.68m、幅1.3mの半地下式有階無段窯窯であり、焼成部床面に平瓦が敷き詰められており、綠釉の点滴が認められること及び窯道具の出土から本窯で綠釉瓦及び綠釉陶器の焼成が行われていたことが明らかとなった。

出土した軒瓦は全て平安宮出土資料と同範のものであり、平安宮造営時の瓦であることが確認され、藤澤一夫氏は本瓦窯が平安宮への供給瓦窯でありながら、『延喜式』の撰録に漏れていることから、小野・栗栖野瓦窯に先行する平安宮創建時の急時の大量需要に対応するための臨時的な瓦窯と位置づけ、窯跡以外には造瓦工房と考えられる遺構は確認されておらず、丘陵一帯の詳細な調査の必要性を指摘した(大阪府教育委員会1968)。

発掘調査後、瓦窯跡はその重要性から昭和46(1971)年6月23日付で国の史跡に指定され、史跡公園として整備された。整備工事に当たっては窯跡等の保存を留意して工事が進められたが、発掘調査範囲が窯跡部分に限られたものであったことから調査地点以外で窯跡や瓦の出土が確認され、遺構等の保存のために園路や広場の設計変更がなされて整備が進められた。

この整備では神社西側の平窯群下方で表土層中の2次堆積と考えられるが、まとまった瓦の出土が確認されると共に、大阪府調査報告によるH 5号窯(現H10号窯)とH 6号窯(現H12号窯)間及びH 5号窯北側で新たに2基の窯跡が確認され、瓦窯の配列状況等、新たな問題が提起された。また、昭和47(1972)年に吉志部神社東側に所在する吉志部古墳の調査においても一部で瓦、灰層の堆積が確認された(吹田市・吹田市教育委員会・関西大学考古学研究室1973)。

昭和50(1975)年には吉志部神社社務所建替えに伴う調査で平窯後方の排水溝の延長部分を確認した。溝は延長8.5mにわたって確認され、この溝中には、灰、焼土が多量に混入しており、多量の瓦を包含していた。溝は最大幅1.7m、最小幅1.1mが確認されたが、後世に削平を受けているため、溝の上端が失われており、当初はもう少し大きかったものと考えられる。溝中堆積土は下層の砂層と、上層の焼土・瓦の混入層に分けられ、前者は本遺構が排水溝としての機能を果たしていたことを示すものであり、後者は溝の廃絶にともなう人為的な溝内堆積土と判断された(吹田市史編纂委員会1981)。

その後しばらくは吉志部瓦窯跡一帯では大規模な開発もなく、本格的な調査が行われることもなかったが、昭和61(1986)年度に史跡南側の府営岸辺住宅の建替えに伴う発掘調査が実施され、粘土探掘坑と考えられる上坑群15基を確認し、これらの上坑群の状況から原料粘土の探掘が計画的に行われたものと考えられた(大阪府建築部・大阪府教育委員会・吹田市教育委員会1987)。また、史跡隣接地における試掘調査において瓦製作に係る回転台跡と考えられる遺構を確認し、瓦窯の前面に工房関連遺構が展開していることを確認した(吹田市教育委員会1987)。

平成2(1990)年度には西方平窯群前面の史跡範囲内で整備に伴う確認調査を実施し、柱穴、土坑、回転台跡等の吉志部瓦窯の工房関連遺構を確認し(吹田市建設緑化部・吹田市教育委員会2004)、平成3(1991)年度及び平成7(1995)年度には瓦窯南側の都市計画道路建設工事に伴う発掘調査で吉志部瓦窯操業期の遺構として、2時期以上の掘立柱建物跡15棟、回転台跡9基、土坑15基、粘土採掘坑11基等の遺構を確認し、吉志部瓦窯工房跡は窯跡を含めて南北190m、東西280m以上の範囲に展開することが明らかとなった(吹田市都市整備部・吹田市教育委員会1998)。

平成8(1996)年度には吉志部神社の防災工事に伴う確認調査を実施し、平窯群の東方延長部に当たる、本殿前面部分に設けた3ヶ所の調査区の内、1ヶ所の調査区で焼土及び灰の堆積層を確認した。この堆積層は層厚10~15cmで、トレーナー北端から8mの地点までの範囲で確認され、窯壁塊及び吉志部瓦窯焼成瓦がまとまって出土した。下層に中世遺物の包含層が堆積し、当該層中からも少量ではあるが中世の土師器や瓦器片が認められることから、中世以降の造成等に伴う2次堆積層と考えられるが、当該地点において平安時代の瓦窯の存在を想定させるものである。

平成9(1997)年度には史跡指定範囲の西側に隣接する地点の府道建設予定地において大阪府



第4図 平成19年度調査地点平面図(S=1:2000)

教育委員会による試掘調査が行われ、平成2(1990)年度に調査された工房関連遺構確認地点の西方延長部分の調査区で2条の溝状遺構が検出されると共に、溝内から軒平瓦を含む瓦が出土し、さらに西側にも遺構の展開することが明らかとなった(大阪府教育委員会1999)。

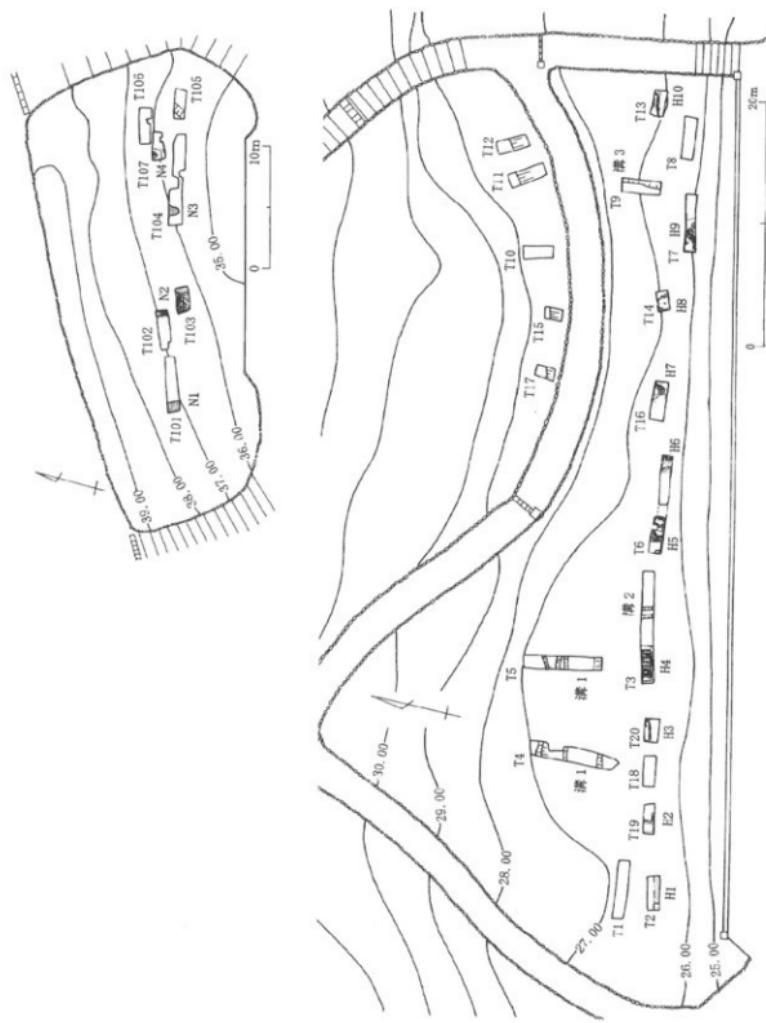
### 3. 平成19(2007)年度の確認調査(紫金山整備に伴う通算第5次調査)

昭和46(1971)年の史跡整備工事時の確認資料と共に今回報告する出土瓦の調査であり、遺構を主とする概要報告を平成22(2010)年度に行っている(吹田市建設緑化部・吹田市教育委員会2011)。調査は史跡整備に係る確認調査であり、吉志部神社西方の平窯群、窯窓群及び平窯後方の溝の位置及び遺存状況の確認等を目的として、計27ヶ所に調査区を設定して調査を実施した(調査面積計122.7m<sup>2</sup>)。平窯については大阪府教育委員会調査によるH1号窯を含めて計10基を確認したが、史跡整備のための状況確認が目的的調査であることから、H4号、H5号窯で窯体の遺存状況の確認のために部分的に床面まで確認した以外は窯体上面での検出に止めた。H4号窯は焼成室を確認し、検出部分で幅2.1m、長さ0.7m以上、窯体内東端の床面まで掘り下げた部分で高さ0.9mが遺存していた。側壁及び隔壁は下半部が内側に厚さ1~2cmで粘土が貼り付けられているために明らかではないが、上半部は平瓦の凸面を上にして長手積みとし、粘土と重ねて積み上げている。床面に6条の分焰牀、7条の焰道を設ける。分焰牀は半截した平瓦と粘土を積み上げ、表面に粘土を貼り付け、高さ30cmであり、隔壁側に高さ14~18cm、幅12cmの通焰孔を確認した。また、確認された隔壁の分焰孔は高さ32cm、幅10cmである。窯体全体を確認できていはないが、焼成室の幅や構造はH1号窯と同様であり、同一の規模、構造の平窯と考えられる。H5号窯は燃焼室を確認し、西側壁は上面がせり出している状況であることから、側壁全面を検出していないが、検出部分ではトレンチ北端は平瓦の凹面を上にした長手積みで、南側へ3/4は平瓦の凹面を上にして小口積みし、粘土と重ねてドーム状に積み上げ、内面に粘土を貼り付けている。トレンチ北端及び南端で部分的に側壁を確認し、確認部分での燃焼部幅はトレンチ北側では1.7m、南側では1.4m以上である。

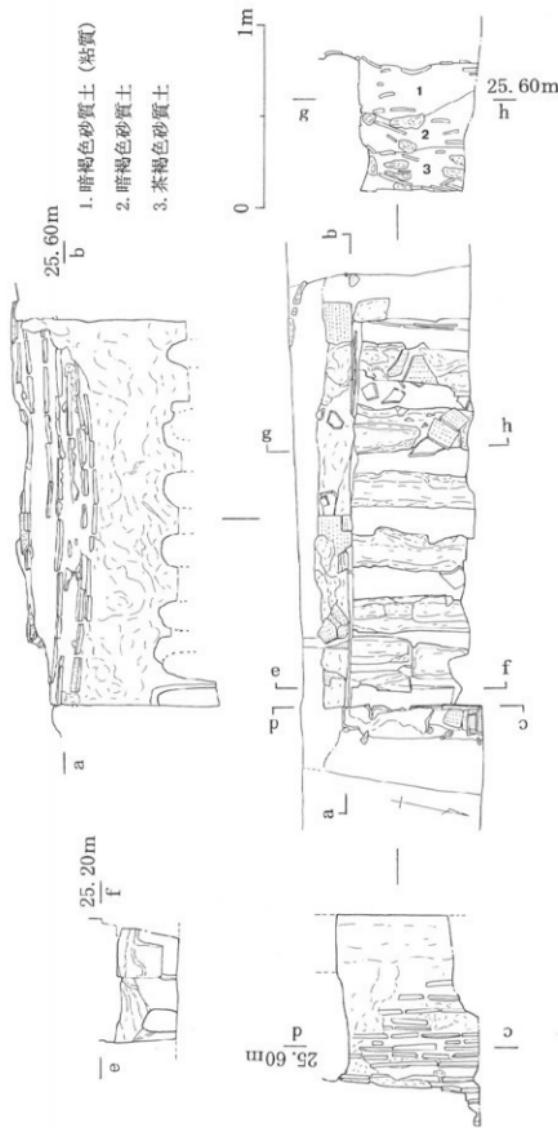
神社西側では調査範囲外で確認されている窯跡2基を含めて計12基の平窯が存在することが明らかとなった。また、平窯背後で東西方向に走行する幅3.1~3.6m、深さ0.2~0.6の溝を確認するとともに、H4号窯とH5号窯の間に幅1.0m、深さ0.5mの、H9号窯とH10号窯の間に深さ0.5mの東西方向の溝に直行する南北方向の溝を2条を新たに確認した。

平窯群上方の窯窓の調査では大阪府教育委員会で調査されたN1号窯、N3号窯を含めて4基の窯を確認した。新たに調査したN2号窯はT102で焼成部の一部を、T103で燃焼部の一部を確認し、半地下式の窯窓である。焼成部の床面の傾斜角度は25°で、部分的な確認ではあるが無段のものと考えられる。検出部分では床面及び側壁共に強い熱を受けた還元状態であり、側壁は最大40cmの立ち上がりが遺存している。燃焼部の床面は15°の傾斜をもち、一部に貼り床が認められるが、全体の遺存状況は良くない。西側では側壁が10~25cmの立ち上がりで遺存しており、側壁については還元状態であった。また、東側では側壁は確認できなかったが、

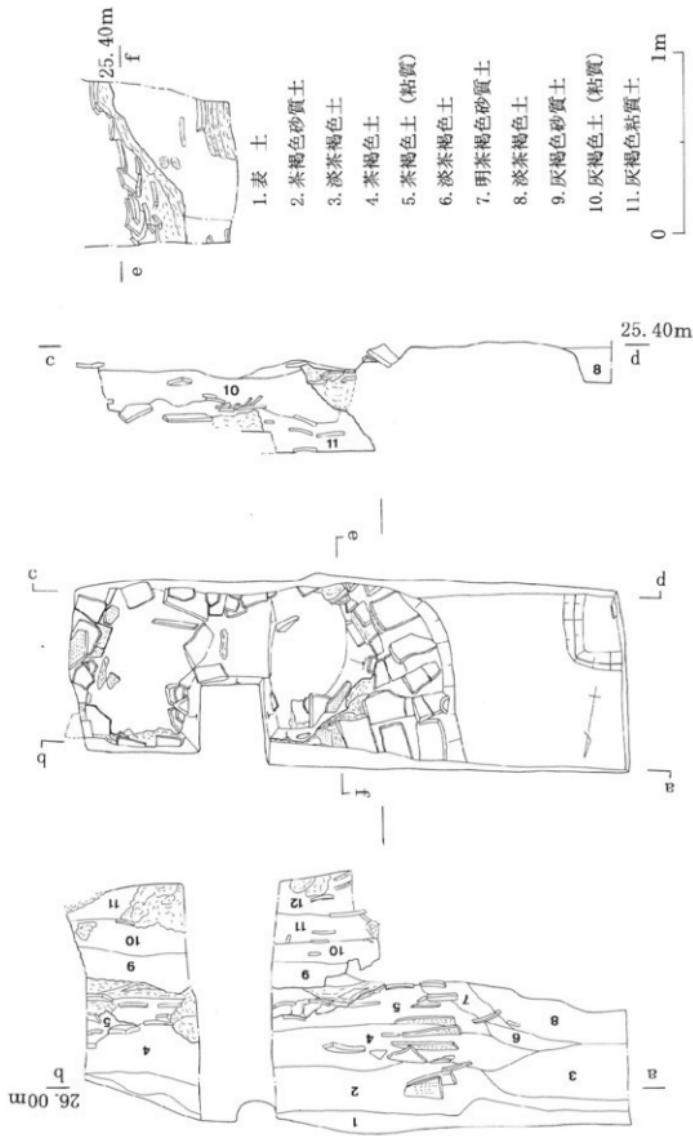
第5図 調査区平面図

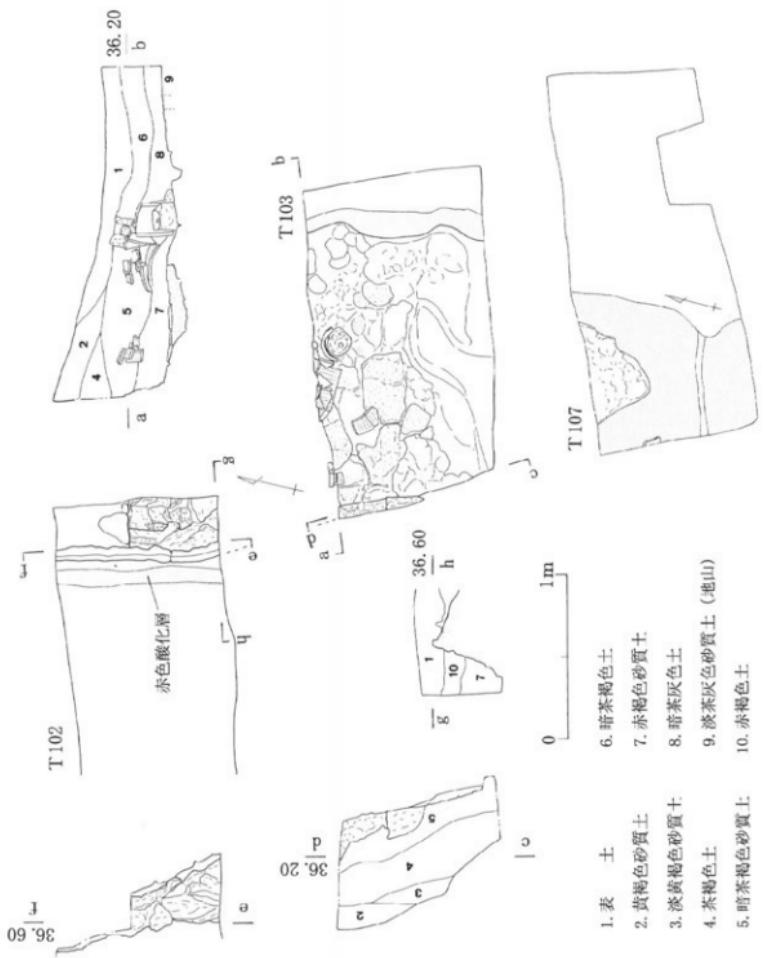


第6図 H 4号窯実測図



第7図 H5号窯測定図





第8圖 N2・N4号點實測圖

トレンチ北端で西側側壁から1.65mの部分で還元面が終わり、外側に赤色酸化層が認められた。また、西側側壁から0.75mの地点に径15cm前後で中心部に径約3cmの穴が開く粘土の柱を芯にして、現状は北側にのみ1本の丸瓦が遺存するが、本来は丸瓦2本を立てたと考えられる状況を確認した。部分的な調査であることや遺存状況があまり良くないことから窯の規模等は明らかではないが、焼成部及び燃焼部の床面の傾斜はN1号窯と同様であり、T102のすぐ南側に階部を有する無段有階式の窯窯と考えられる。

以上のように調査範囲は限られたものであることから、各窯の詳細な状況は明らかではなく、同時期に何基の窯が操業していたか等の操業状況は明らかではないが、H4号窯、H5号窯の調査状況や確認された窯の配列状況等から、神社西側の12基の平窯はほぼ同規模、同構造で東西方向のほぼ同一線上に配置されているものと考えられる。さらに南北方向の溝によって画された5基1単位の可能性が考えられ、各窯の間隔は中心間約6mで配置されていたものと考えられる。窯窯は昭和43(1968)年に調査された2基以外に2基の窯を確認し、縁釉の点滴の認められる瓦や窯道具等が出土したが、東端の窯(N4号窯)から東側は後世の造成等により大きく削平された状況であることから、他にも窯窯が存在した可能性が考えられる。

これまでの調査によって、吉志部瓦窯跡では西側で確認された平窯とともに、昭和43(1968)年の調査で、発掘調査はされていないことから実態は不明であるが、H12号窯の東方約85mで西側の平窯群とほぼ同一線上の地点において窯3基が確認されていることや、平成8(1996)年度の神社本殿前面の調査から、東側にもまとまって平窯が存在することが想定され、東西200m以上の範囲に平窯が規則的に配置されていたことが考えられる。

また、平窯群前面で確認された工房跡の構造については2時期以上の構造の展開が考えられることから瓦窯についても個々の窯の操業時期等明らかでない問題も多いが、広範な範囲に計画的に窯を配置して操業していたものと考えられる。工房跡の調査状況からも瓦生産に関わる一連の作業が大規模に効率的、集中的に行なわれていたものと考えられ、大量の瓦を必要とする平安官造営当初の官営造瓦工房の実態を表しているものと考えられる。

#### 4. 出土瓦の概要

これまでに吉志部瓦窯跡で確認された軒瓦は軒丸瓦6種(ka1～ka6)、軒平瓦6種(kb1～kb6)である。軒瓦の型式名は「吹田市史第8巻」及び網伸也氏によって追加命名されたものを使用する(吹田市史編纂委員会1981、網伸也2005)。

軒丸瓦は单弁十六弁蓮華紋軒丸瓦(ka1)と複弁八弁蓮華紋軒丸瓦(ka2)が吉志部瓦窯生産の軒丸瓦で主となるものと考えられ、ka2は西賀茂瓦窯跡NSA154A、大山崎瓦窯0Y109と同范である((財)古代学協会1978、大山崎町教育委員会2010)。ka3は小型の单弁十二弁蓮華紋軒丸瓦で、小型軒平瓦kb2に対応するものと考えられる。ka4は单弁八弁蓮華紋軒丸瓦で、焼成は他の軒丸瓦に比べて良好で堅緻なものが多く、縁釉の施されたものも認められる(藤澤一大1967)。ka5は工房跡の調査で確認された单弁八弁蓮華紋軒丸瓦で、ka4とほぼ同紋である。

ka6は工房跡の調査で確認された単弁の小型軒丸瓦で、中房は平坦で界線によって表現され、1 + 4の蓮子を配する。内区には先端が最もふくらむ蓮弁が雑に並ぶ。内外区を一重の界線で画し、珠紋は比較的広い間隔で配される。

軒平瓦は均整唐草文軒平瓦で、kb1は西賀茂瓦窯等洛北の瓦窯では同範例は認められず、吉志部瓦窯独自の范と考えられる。kb2は小型の均整唐草紋軒平瓦である。kb3は西賀茂瓦窯跡NS205Aと、kb4は西賀茂瓦窯跡NS202Aと同范である((財)古代学協会1978)。kb5は吉志部瓦窯の中では最も大きなものであり、大極殿周辺で縁袖の施されたものの出土が確認されている(網2005)。kb6はkb1と紋様が似るが、中心飾の対向するC字形の下端が、二段に分かれ、大山崎瓦窯OY204aと同范である(大山崎町教育委員会2010)。

吉志部瓦窯の瓦は、平安宮においては内裏での調査で出土が確認されるが少なく、朝堂院東北隅回廊の調査で軒丸瓦ka2、軒平瓦kb4・kb6が多く出土し、豊楽院の調査では軒丸瓦ka1・ka2・ka4、軒平瓦kb1・kb3・kb6が出土し、特にka4の出土が目立ち、これらの調査状況から吉志部瓦窯の瓦は朝堂院と豊楽院への供給が主体であったことが指摘されている(網2005)。

また、平安京以外では京都府向日市中福知遺跡で軒丸瓦ka2・ka3、軒平瓦kb2・kb3・kb4((財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991・1996)、大阪府枚方市百済寺跡で軒丸瓦ka1・ka2、軒平瓦kb4(古闕正浩2010)、茨木市新庄遺跡で軒丸瓦ka2(大阪府教育委員会1966)、東大阪市若江遺跡で軒丸瓦ka2、軒平瓦kb4((財)東大阪市文化財協会1988・福永信雄1989)、吹田市高浜遺跡で軒丸瓦ka4(吹田市史編纂委員会1981)、同垂水南遺跡で軒平瓦kb3(大阪府教育委員会1986)、同吹田操車場遺跡で軒丸瓦ka2((財)大阪府文化財センター 2010)の出土が確認されている。

## 第2章 出土瓦

今回、報告するのは平成19(2009)年度に実施した史跡整備等に伴う確認調査(通算第5次調査)及び昭和46~47(1971~1972)年に実施した史跡整備工事等において確認された資料である。

### 1. 出土状況

#### (1) 史跡整備

整備に伴う造成工事において、西側の平窯群下方で多くの瓦が確認されており、軒瓦は軒丸瓦5型式39点、軒平瓦5型式10点が確認された。平瓦及び丸瓦は遺物収納コンテナ(39×59×15cm)15箱分あり、平瓦片が大半を占めるがほとんどが細片である。これらの瓦は上方からの土砂の流出に伴う2次堆積の資料と判断される。

#### (2) 確認調査

調査では遺物収納コンテナ87箱分出土しており、古墳時代の須恵器、埴輪、中世の上師器がコンテナ1箱分で、他は瓦であり、そのほとんどは瓦窯閉窯後による2次堆積の資料と考えられるが、平窯背後の溝1出土資料は瓦窯閉窯後に一時期に廃棄された可能性の考えられる資料である。軒丸瓦は3型式9点、軒平瓦は5型式9点が確認されており、内、2点の軒丸瓦ka4が窯窯調査区の出土であり、他は平窯調査区の出土である。また、丸瓦と平瓦の出土点数は遺構内堆積土出土のもの破片数で、H4号窯では丸瓦11点、平瓦278点、H5号窯では平瓦50点、溝1では丸瓦36点(T4 15点、T5 21点)、平瓦1,255点(T4 839点、T5 416点)、溝3では丸瓦57点、平瓦239点であり、平瓦がH4号窯で96%、H5号窯で100%、溝1で97%、溝3で96%と、各遺構とも部分的な調査ではあるが平瓦が圧倒的多数を占める。ただ、平瓦には縦方向に半截された状況のものが多く認められ、窯壁として使用されていたものも多くあると考えられる。また、丸瓦と平瓦の隅部分の破片総数から個体数を検討するとH4号窯で丸瓦18点、平瓦173点、H5号窯で平瓦25点、溝1で丸瓦98点、平瓦895点、溝3で丸瓦18点、平瓦205点である。

### 2. 軒丸瓦(図版編 1~39・50~58・68~76)

軒丸瓦は5型式(ka1, ka2, ka3, ka4, ka5)認められ、瓦当はほぼ完形のものも多くあるが、丸瓦部との接合部で剥離しているものがほとんどであり、68~76は瓦当の剥離した丸瓦部である。

#### ka1(単弁十六弁蓮華紋軒丸瓦 1~11・50~55)

1~11は史跡整備時資料、50~55は確認調査T5溝1、52はT4溝1、51~53~54はT9溝3出土。確認できる資料では直径16.0~16.7cm、中房径4.2~4.6cm、瓦当厚2.6~3.2cmである。中房は平坦で界線によって表現され、1+6の蓮子を配す。蓮弁は間隔を有し、先端よりやや下った部分が最も太くなる丸みを帯びた子葉が中房まで達している。内区と外区は比較的太い界線で画し、外区内縁に16個の珠紋を蓮弁及び間弁に対応して配する。外区外縁(周縁)は先端

が摩滅しているものもあるが、0.7～1.4cmでわずかに斜めに立ち上がる。また、瓦当外周に後の調整や磨滅等のために不明瞭なものが多く、部分的にはあるが外縁端から0.7～1.4cm程の内区の紋様の深さとほぼ一致するところに一段、範端の痕跡が認められるものがある(2・3・4・54)。胎土は1～2mmの石英、長石、雲母を含み、焼成は良好で堅緻なものが多い。

瓦当と丸瓦部との接合については、瓦当裏面の状況をみると瓦当上端よりやや下った部分に丸瓦を当て、上方及び下方に粘土を充填している。瓦当裏面に丸瓦との接合痕が認められもので、1～4は瓦当裏面の外側に向かってやや斜めに窪んだ状況であり、瓦当が剥離していることから型式は不明であるが70の丸瓦部先端は弱く内傾していることから、先端の内傾した丸瓦を瓦当裏面に押し付けて接合しているものと考えられる。但し、7のように先端のほぼ平らな状況のものも認められる。内面の接合線は確認できるものでは台形状をなす。また、10は丸瓦部先端下方の下から2.4cmのところで内側にくの字状に屈曲している状況が確認され、先端に焼けひずみのある丸瓦を使用し、粘土の充填で整形しているものと考えられる資料である。

凸面の調整は瓦当上方は丸瓦部接合後、横方向のナデを、丸瓦部が遺存している10・11は縦方向のナデが認められる。凹面は10・11・50・54は瓦当裏面から丸瓦部の充填部分を縦方向のナデを施し、そこから玉縁にかけては未調整で布目痕が残る。

#### ka2(複弁八介蓮華紋軒丸瓦 12～35・56)

12～35は整備時資料、56は確認調査T3溝2出土。直径は16.0～16.8cm、中房径3.6～3.8cm、瓦当厚2.6～3.4cmで直径及び瓦当厚はka1とほぼ同様である。界線で画された中房はやや高まり、1+6の蓮子を配する。複弁の輪郭線は一重で、撥形の間弁を配する。内区と外区は二重の界線で画し、外区内縁に蓮弁及び間弁に対応して16個の珠紋を配する。外区外縁は0.8cmを主に0.7～1.0cmでわずかに斜めに立ち上がる。また、瓦当外周にkalと同様に部分的にはあるが外縁端から0.8cm程のところに一段、範端の痕跡が認められるものがある(12・13・15・28)。胎土は1～2mmの石英、長石、雲母を含み、焼成は良好で堅緻なものが多い。

丸瓦部との接合はkalと同様であるが、確認できるものでは瓦当裏面の外側に向かってやや斜めに窪んだ状況のものが多い。但し、18のようにやはり接合部の端面のほぼ平らな状況が確認されるものも認められる。丸瓦部の遺存する18は全長39.5cm、幅14.9cm、厚さ1.9cmで、調整は、凸面は磨滅のため不明であるが、凹面は瓦当裏面から中ほどまで縦方向のナデを施し、そこから玉縁にかけては未調整で布目が残る。

範傷については、摩滅等のため不明瞭なものが多いが、中房内に2ヶ所横方向の傷が認められる段階のもの(12・14・16)、さらに蓮弁と間弁の弁端が傷によって一連につながり圈線状を呈する段階のもの(17、19、23、28)、間弁の退化が著しく、複弁と二重圈線の紋様構成の原形をほとんど失っている段階のもの(24)があり、範傷進行状況の第2段階から第4段階に相当するものである(古閑2004)。

#### ka3(单弁十二介蓮華紋軒丸瓦 39)

整備時資料。小型軒丸瓦で直径10.2cm、中房径2.7cm、瓦当厚2.7cm。界線で画された中房は

平坦で1+4の蓮子を配する。蓮弁の配置は右下方で他よりもやや間隔が開く。内区と外区を一重の界線で画し、大阪府教育委員会調査時出土の同范資料では外区内縁に16個の珠紋を配する。外区外縁は0.6cmで斜めに立ち上がる。胎土は1~2mmの石英、長石、雲母を含み、焼成は良好で堅緻である。

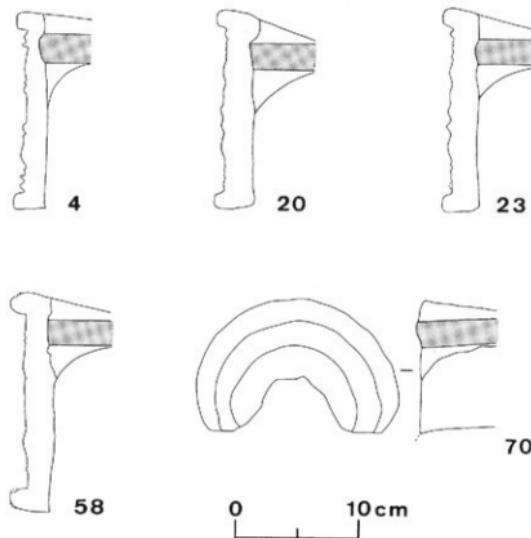
#### ka4(単弁八弁蓮華紋軒丸瓦 36・57・58)

36は整備時資料、57は確認調査T103、58はT106出土。直径は天地17.7~17.8cm、左右18.2~18.4cmとやや梢円形でka1、ka2よりも大きく、中房径3.7~3.8cm、瓦当厚3.2~3.4cm。界線で画された中房は平坦でやや小粒な1+5の蓮子を配する。蓮弁は先端が窪み、先端が太くなる丸味を帯びた間弁を配する。内区と外区を二重の界線で画し、外区内縁に蓮弁及び間弁に対応して16個の珠紋を配する。外区外縁は1.2~1.4cmでわずかに斜めに立ち上がる。また、瓦当外周に部分的にではあるが外縁端から1.0~1.5cmのところに一段、範端の痕跡が認められるものがある(57・58)。胎土は1~2mmの石英、長石、雲母を含み、焼成は他に比べてより硬質に焼成されおり、58は表面がさらに強い熱を受けた状況がみられる。

丸瓦部との接合は、確認できる57・58では丸瓦部の端面は平らであり、調整は57では凸面は縱方向にナデを施し、凹面は横方向のナデを施した後に瓦当裏面側から左斜め上に向けてナデ上げている。

#### Ka5(単弁八弁蓮華紋軒丸瓦 37)

整備時資料。蓮弁は先端が窪み、先端が太くなる丸味を帯びた間弁を配する紋様構成がKa4



第9図 軒丸瓦接合模式図

1 軒丸瓦接合痕

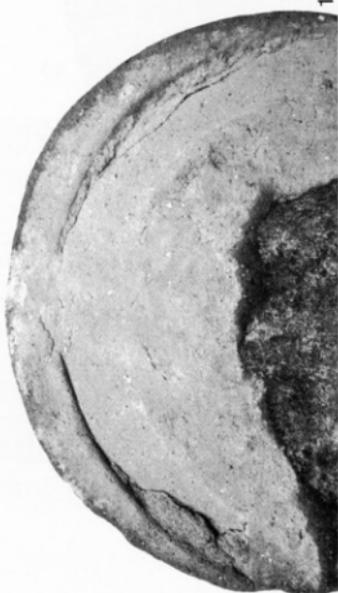
12



58



1



23





10



54

2 轩瓦接合状况



74



57

3 軒丸瓦接合状況2



54



57

4 軒丸瓦調整状況

と類似することから単弁八弁と想定するものである。確認されているものは破片のみであることから直径は明らかではないが、ka4よりやや小さくka1、ka2と同様と考えられる。蓮弁及び間弁はka4より太く、盛り上がりも強い。外区外縁と珠紋の間に2か所范傷が認められ、これは工房跡の調査で確認されたものと同じである。内区と外区を画する界線は一重の細く低いものが認められるが、その外側にもう一重同心円状の痕跡のようなものが部分的に認められ、細い二重の界線が巡らされていたものの外側の界線が剥離したものか、あるいはもう少し太い一重の界線の剥離した痕跡の可能性もあるが、本資料及び工房跡の資料についても表面の磨滅のために断定はできなかった。胎土は1～2mmの石英、長石、雲母を含み、焼成はka1、ka2と同様で、ka4ほど硬質ではない。

瓦当が剥離した丸瓦部である68～76の内、68は丸瓦部がほぼ完存しており、全長35.6cm、瓦当接合部で幅15.0cm、ほぼ中央で幅16.3cm、厚さ2.2cmで、調整は凸面は摩滅のため明らかでないが、凹面は、瓦当接合に伴う粘土充填部は縦方向にナデ調整を施し、そこから玉縁にかけては未調整で布目が残る。また、底面は縦方向にヘラケズリを施し、玉縁部側面を面取り状にヘラケズリを施し、底面を筒部の端面方向からヘラケズリにより面を持つ。70は丸瓦部の接合部下端近くが内側に彎曲している。

### 3. 軒平瓦(図版編 40～49・59～67)

均整唐草文軒平瓦で、5型式(kb1、kb2、kb3、kb4、kb6)認められるが、軒丸瓦に比べると点数は少なく、遺存状況は1／2以下のものが大半である。顎の形態はいずれも瓦当凸面から彎曲しながら平瓦部へ移行する曲線顎である。

#### kb1(41・43・59)

41・43は整備時資料、59は確認調査T7出土。同范資料では上弦幅27.4cm、下弦幅28.9cm、瓦当面の厚さ7.5cm、中心飾は先端を内側に巻き込むC字形で、41・43では左側上方に范傷が認められる。唐草は同范資料では左右に2回反転する。外区と内区を細い界線で画し、同范資料では上下外区内縁に珠紋をそれぞれ11個、左右脇区にそれぞれ1個配す。41の瓦当の凸面側はやや丸味をもつ。摩滅のため調整は不明な部分が多いが、41の瓦当凸面側及び59の凹面側は横方向のヘラケズリを施し、43は凹面外側端を瓦当部分から平瓦部にかけて面取り状に縦方向にヘラケズリを施している。胎土は1～2mmの石英、長石、雲母を含み、焼成は良好である。

#### kb2(40・60)

40は整備時資料、60は確認調査 T7出土の小型の軒平瓦である。同范資料では瓦当面中央部で幅約20cm、瓦当面の厚さ4.8cmで、中心飾は対向するC字形で、上端が外側に屈曲して伸びる。唐草は小ぶりで、同范資料では左右に3回反転し、先端を巻き込む。60は凸面側の顎部分は横方向のヘラケズリ、平瓦部は縦方向のヘラケズリ後ナデを施し、凹面は瓦当端から5cm位まで横方向にヘラケズリを施し、そこからは未調整で布目が残る。また、凹面外側端を面取り状に2段縦方向にヘラケズリを施している。胎土は1～2mmの石英、長石、雲母を含み、焼成は良



68



62

5 軒丸瓦調整狀況2・軒平瓦凸面布目

好で60は特に硬質に焼成されている。

#### kb3(44~46・48・61)

44~46・48は整備時資料、61は確認調査時表採資料。44及び同範資料では上弦幅29.6cm、下弦幅29.5~31.2cm、瓦当面の厚さ7.3cm、中心飾りは対抗するC字形で、左右に3回反転する唐草を配し、右1転目の主葉と枝葉が接している(44・45)。同範資料では珠紋を上外区内縁に11個、下外区内縁に12個、左右脇区にそれぞれ2個配す。45で外区外縁及び右脇区外縁端面上半部に段が認められ、右脇区側の段の外側は未調整であることから範端の可能性が考えられる。

また、46は左端近くの上外区から脇区中ほどにかけて斜めに範傷が認められ、44・45は右外区上角が欠けて台形状を呈している。調整については摩滅している部分が多いが、45は瓦当部分下側に横方向にヘラケズリを施し、44・48は凹面外側端を面取り状に2段縱方向にヘラケズリを施している。44及び48の凸面には一部に痕跡程度ではあるが縱方向の繩目タタキが認められる。胎土は1~2mmの石英、長石、雲母を含み、焼成は良好である。

#### kb4(47・49・62~66)

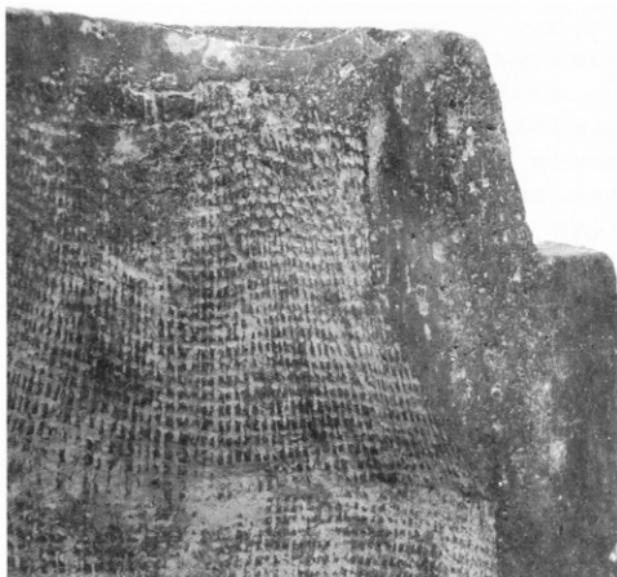
47・49は整備時資料、62・63は確認調査T5溝1出土、64はT3、65はT7、66はT4溝1出土。同範資料では上弦幅28.0cm、下弦幅27.8cm、瓦当面の厚さ6.3cm、中心飾りは「小」字形で左右に3回反転する唐草紋を配するが、62・65は唐草紋部分の盛り上がりがほとんどなく、低く平らである。同範資料では珠紋を上下外区内縁にそれぞれ14個、左右脇区にそれぞれ1個配す。また、62は瓦当上外区外縁が、64は下外区外縁がヘラケズリ等の調整のためであろうが、他よりも幅が細くなっている、その部分に弱い段が認められる。49の凹面は瓦当端6.5cmまで横方向にヘラケズリを施し、そこからは未調整で布目が残り、61は凹面外側端を面取り状に1段縱方向にヘラケズリを施している。62は平瓦部凸面の頸から狭端部側に縱方向のヘラケズリ後ナデを施すが、一部に布目が認められる。胎土は1~2mmの石英、長石、雲母を含み、焼成は良好で、特に49は硬質である。

#### kb6(42・67)

42は整備時資料、67は確認調査T9溝3出土。67及び同範資料では上弦幅27.8cm、下弦幅29.5cm、瓦当面の厚さ5.2cmでKb1と類似する紋様であるが、中心飾りの対抗するC字形の下端が、二又に分かれる。唐草は左右2回反転する。同範資料では珠紋を上下外区内縁にそれぞれ11個、左右脇区にそれぞれ1個配す。42の凸面は瓦当から頸部にかけては横方向にヘラケズリを施し、そこからは縱方向にヘラケズリ後ナデを施す。67の凸面は摩滅のため不明瞭であるが、凹面は瓦当端から5cm程横方向にヘラケズリを施し、そこからは未調整で布目が残る。胎土は1~2mmの石英、長石、雲母を含み、67は焼成があまく、42は良好で硬質である。

### 4. 丸瓦(図版編 77~99)

玉縁式丸瓦で、77~86は整備時資料、87~89は確認調査T3 H4号窯、90はT9溝3、91はT6、92~99はT4及びT5溝1(92・93:T4、94~99:T5)出土。



77



77

6 丸瓦細部

全体の概要の分かるものをみると、77は全長29.5cm、玉縁長3.1cm、広端幅13.5cm、狭端幅8.3cm、厚さ1.8cm。筒部凸面はナデを施しているが、一部に縦方向の繩目タタキの痕跡が認められる。玉縁は横方向にナデを施し、筒部側がやや窪んでいる。凹面は筒部広端から1.4cm前後横方向にヘラケズリを施すが、そこから玉縁端にかけて布目(縦6本／1cm、横5本／1cm)が残る。側面はヘラケズリを施し、玉縁まで水平であるが、筒部及び玉縁の凹面側を0.3～1.2cm幅で面取り状にヘラケズリを施している。

78は全長35.8cm、玉縁長5.8cm、広端幅15.9cm、狭端幅8.9cm、厚さ1.6cm。筒部凸面はナデを施しているが、一部に縦方向の繩目タタキの痕跡が認められる。玉縁は筒部側から1/2まで横方向の丁寧なナデを施している。凹面は筒部広端から0.9～2.0cm横方向にヘラケズリを施すが、そこから玉縁にかけて布目(縦8本／1cm、横8本／1cm)を残す。筒部広端面は内傾する面を持ち、側面はヘラケズリを施し、玉縁側面は筒部の端面方向からヘラケズリにより面を持つ。

79は全長37.7cm、玉縁長5.8cm、玉縁上幅16.0cm、狭端幅8.5cm、厚さ2.0cm。筒部及び玉縁凸面はナデ調整を施し、凹面は筒部広端から0.6～0.8cm横方向にヘラケズリを施すが、そこから玉縁端にかけて布目(縦6本／1cm、横5本／1cm)が残る。側面はヘラケズリを施し、玉縁の凹面側を面取り状にヘラケズリを施している。

87は全長36.5cm、玉縁長5.8cm、玉縁上幅15.4cm、狭端幅8.8cm、厚さ1.8cm。筒部凸面はナデを施すが、10本／3cmの縦方向の斜めタタキが比較的残り、玉縁は横方向のナデを施す。凹面は筒部から玉縁にかけて布目が残る(縦7本／1cm、横7本／1cm)とともに筒部には糸切痕が認められる。また、凹面に布端と考えられる縦方向の線状の窪みが認められ、そこから筒部側面にかけて6cmほど布の被らない部分が認められる。筒部広端面は内傾する面を持ち、側面はヘラケズリを施し、筒部は0.5cm前後、玉縁は2.0cm前後の幅で凹面側を面取り状にヘラケズリを施しており、玉縁側面は筒部の端面方向からヘラケズリにより面を持つ。

88は全長37.4cm、玉縁長5.8cm、玉縁上幅14.6cm、狭端幅8.1cm、厚さ1.2cm。筒部凸面はナデを施すが、玉縁側に9本／3cmの縦方向の繩目タタキが残り、玉縁は横方向のナデを施し、側面近くを面取り状にヘラケズリを施している。凹面は筒部広端から0.5cm横方向にヘラケズリを施すが、そこから玉縁にかけて布目が残る(縦7本／1cm、横6本／1cm)。また、凹面に布端と考えられる縦方向の線状の窪みが認められ、そこから筒部側面にかけて布の被らない部分が認められる。筒部広端面は内傾する面を持ち、側面はヘラケズリを施し、筒部は0.3cm前後、玉縁は1.0cm～1.7cmの幅で凹面側を面取り状にヘラケズリを施しており、玉縁側面は筒部の端面方向からヘラケズリにより面を持つ。

94は全長35.9cm、玉縁長5.0cm、玉縁上幅15.2cm、狭端幅8.0cm、厚さ1.5cm。筒部凸面は11本／3cmの縦方向の繩目タタキが認められ、玉縁は横方向のナデを施す。凹面は筒部端から玉縁にかけて全面布目が残る(縦8本／1cm、横7本／1cm)とともに筒部には糸切り痕が認められる。筒部広端面は内傾する面を持ち、側面は平らにヘラケズリを施し、玉縁側面は筒部の端面方向からヘラケズリにより面を持つ。

95は全長35.4cm、玉縁長5.7cm、玉縁上幅15.6cm、狹端幅8.0cm、厚さ1.3cm。筒部凸面は12本／3cmの縦方向の繩目タタキが認められ、玉縁は横方向のナデを施す。凹面は摩滅のため布目は不明である。筒部広端面は内傾する面を持ち、側面は平らにヘラケズリを施し、玉縁側面は筒部の端面方向からヘラケズリにより面を持つ。

96は全長37.0cm、玉縁長5.8cm、玉縁上幅16.1cm、厚さ1.7cm。凸面は摩滅のため不明であり、凹面は筒部端から玉縁にかけて全面布目が残る(縦7本／1cm、横6本／1cm)。

97は全長37.7cm、玉縁長6.2cm、厚さ1.7センチ。筒部凸面は11本／3cmの縦方向の繩目タタキが認められる。凹面は筒部広端から1.5cm、玉縁狭端から0.8cm横方向にヘラケズリを施すが、他は布目が残る(縦8本／1cm、横8本／1cm)。側面はヘラケズリを施し、筒部は1.4cm前後、玉縁は1.0cmの幅で凹面側を面取り状にヘラケズリを施しており、玉縁側面は筒部の端面方向からヘラケズリにより面を持つ。

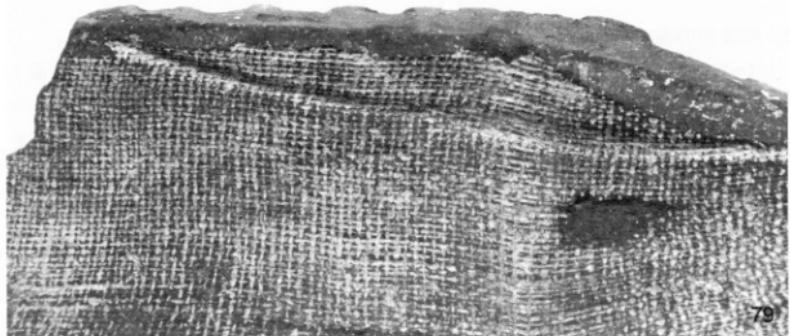
99は全長37.1cm、玉縁長6.7cm、広端幅16.3cm、狭端幅9.0cm、厚さ1.6cm。筒部凸面は10本／3cmの縦方向の繩目タタキが認められる。玉縁狭端から0.6cm横方向にヘラケズリを施すが、筒部広端にかけて布目が残る(縦7本／1cm、横7本／1cm)。筒部広端面は内傾する面を持ち、側面は平らにヘラケズリを施し、玉縁側面は筒部の端面方向からヘラケズリにより面を持つ。

丸瓦は計測可能なものでみると寸法は大きく2種類に分けられ、77は他より小型で、他は全長35.4～37.7cm、玉縁長5.8～7.3cm、広端部幅15.9～16.3cm、厚さは1.2～2.0cmである。

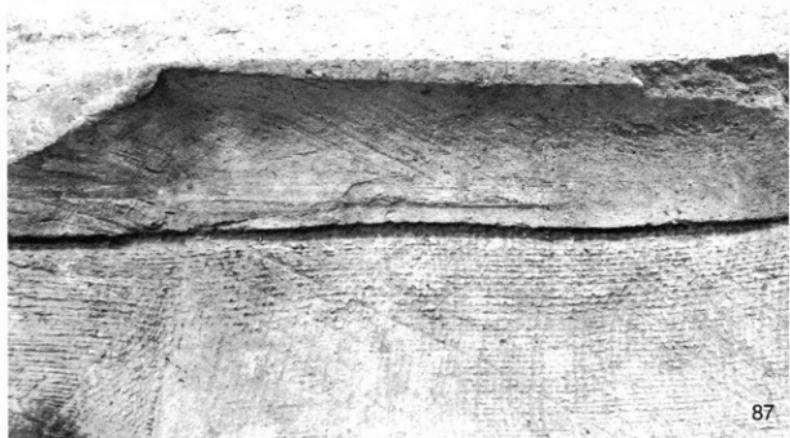
玉縁は筒部と一体で成型されており、段部に粘土を充填している。筒部凸面は繩目タタキを施すが、ナデ調整によって消されているものが大半であり、繩目タタキが確認できるものも部分的なものが多い。繩目タタキは3cm×3cmの範囲に5粒で9～11本、6粒で11～13本である。

凹面は縦6～8本／1cm、横5～8cm／1cmの布目が認められるが、21点の資料をみると縦7本、横6本及び7本のものが最も多く、47.6%を占め、次いで縦6本、横5本及び6本のものが28.5%を占める。布目は全面に残るもの(87・94・95・96・98)と、広端側の先端から0.5～2.0cmをヘラケズリにより布目を消しているもの(77、78、79、88)、広端及び狹端側をヘラケズリを施すもの(97)、狹端側のみヘラケズリを施すもの(99)がある。また、縦方向に布の重ね目痕と考えられる幅5mm程の深い線状の窪みが1ないし2条認められるもの(78・79・84・89・94)や布の被らない部分が認められるもの(87、88、90)がある。

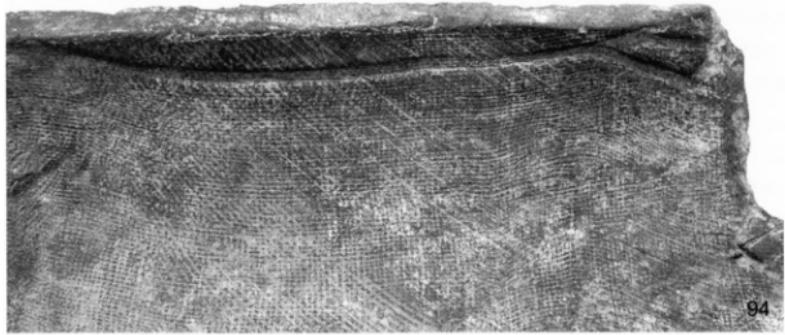
筒部の先端は内傾して面を持つもの(78・87・99)と、水平なもの(77・79・94・95・98)があり、側面はヘラケズリを施し、平らなままのもの(78・79・82・89・93・94・95・98・99)と凹面側をおよそ0.5～1cm幅で面取りし面上にヘラケズリを施しているもの(77・81・83・87・88・97)がある。玉縁は凹面側を面取り状にヘラケズリを施すものが多く、また、底面を筒部の端面方向からヘラケズリを施し面を持つものが大半である。胎土は1～3mmの石英、長石、雲母を含み、焼成は良好である。



79



87



94

7 丸瓦細部2

## 5. 平瓦(図版編 103~195)

104~113は整備時資料、115~129は確認調査 T 3 H 4 号窯、130~148・194はT 4 溝 1、149・150はT 3 溝 2、151~156はT 9 溝 3、157~158・160~170・180はT 5 溝 1、159・193はT 3、171~175・195はT 6、176~178はT 7、179・192はT 8、181~188はT 103、189はT 6、190・191はT 3 H 4 号窯出土。

全体の概要の分かるものをみると、焼けひずみのみられるものが多いが、103は全長35.0cm、広端幅26.5cm、狹端幅23.5cm、厚さ2.3cm。凸面は摩滅のためあまり明瞭ではないが、部分的に縦方向の11本／1cmの繩目タタキが認められ、凹面は両方の側面側、幅1.5cm前後の範囲が摩滅のため不明瞭であるがヘラケズリかナデが施され、他は全面布目が認められる(縦6本／1cm、横6本／1cm)。広端面及び狭端面はヘラケズリにより内傾する面をなし、側面はヘラケズリを施す。

104は、全長34.9cm、広端部及び狹端部を欠くためほぼ中央の幅は26.6cm、厚さ2.1cm。凸面は全面に10本／3cmの縦方向の繩目タタキが認められ、凹面は摩滅のため不明瞭であるが、ほぼ全面布目が認められ(縦6本／1cm、横7本／1cm)、さらに側面の凹面側1／2位まで布目が認められる。側面の凸面側1／2はヘラケズリが施されている。広端面及び狭端面はヘラケズリにより内傾する面をなし、側面はヘラケズリを施す。

105は全長37.2cm、狹端部幅24.8cm、厚さ2.0cm。凸面はほぼ全面に10本／3cmの縦方向の繩目タタキが認められるが、狹端部の2／3ほど、幅2cm前後横方向にヘラケズリを施している。凹面は糸切り痕が認められ、側面から幅2.5cm前後を除き布目(縦7本／1cm、横7本／1cm)が認められる。また、広端部側に部分的に2~4cm幅で接合痕が認められる。広端面及び狭端面はヘラケズリにより内傾する面をなし、側面はヘラケズリを施す。

106は全長36.6cm、中央部で幅29.6cm、厚さ2.3cmで凸面は10本／3cmの縦方向の繩目タタキが認められる。凹面は糸切り痕が認められ、右側面側で幅0.8cmヘラケズリにより布目が消されるが、他は布目が残る(縦6本／1cm、横6本／1cm)。広端面及び狭端面は平で、側面はヘラケズリを施す。

107は全長37.2cm、中央部で幅27.4cm、厚さ2.4cm。凸面は全面に9本／3cmの縦方向の繩目タタキが認められる。凹面は糸切り痕が認められ、狹端部及び右側面側に1cmヘラケズリを施し、他は布目が残る(縦7本／1cm、横7本／1cm)。広端面及び狭端面は弱く内傾する面をなし、側面はヘラケズリを施す。

108は全長35.5cm、厚さ2.5cm。凸面は全面に9本／3cmの縦方向の繩目タタキが認められる。凹面は糸切り痕が認められ、摩滅のため不明瞭であるが左側面側で幅2cm布目が認められず、他は全面布目が残る(縦8本／1cm、横8本／1cm)。広端面及び狭端面はヘラケズリにより内傾する面をなし、左側面は3段にヘラケズリを施している。

115は焼けひずみが大きく、全長33.7cm、広端幅26.2cm、狹端幅22.5cm、厚さ2.7cm。凸面は全面12本／3cmの縦方向の繩目タタキが認められる。凹面は糸切り痕が認められ、広端部側で幅

0.5cm、狹端部側で幅1.5cm、両側面側で幅0.5cmヘラケズリを施し、他は布目が残る。広端面及び狭端面はヘラケズリにより内傾する面をなすが、広端面の凸面側は全体につぶれた状況である。側面はヘラケズリを施す。

116は全長33.8cm、広端幅27.7cm、厚さ1.8cm。凸面は10本／3cmの縦方向の繩目タタキが認められる。凹面は広端部側で幅1.0センチ、狹端部側で幅1.0～1.5cm、両側面側で幅1.0～1.5cmヘラケズリを施し、他は布目が残る(縦6本／1cm、横5本／1cm)。広端面及び狭端面はヘラケズリにより内傾する面をなし、側面はヘラケズリを施す。

117は焼けひずみが大きく、全長34.5cm、中央部で幅25.2cm、厚さ2.5cm。凹凸面ともに摩滅しているが、凸面は9本／3cmの縦方向の繩目タタキが認められ、凹面は糸切り痕が認められ、布目が残る(縦9本／1cm、横9本／1cm)。広端面及び狭端面は平らで、側面はヘラケズリを施す。また、凹面の狹端部近くで、側面に沿って一部が弱く段状になっており、製作台の端が当たった痕跡である可能性が考えられる。

118は焼けひずみが大きく、全長34.2cm、狹端幅23.7cm、厚さ1.6cm。凸面は全面8本／3cmの縦方向の繩目タタキが認められる。凹面は狭端面側が幅7.0cmでヘラケズリ後横方向のナデを施し、右側面側の幅1.5cmヘラケズリを施し、他は布目が残る(縦7本／1cm、横7本／1cm)。広端面及び狭端面はヘラケズリにより大きく内傾する面をなし、側面はヘラケズリを施している。

130は全長35.2cm、狭端幅23.9cm、厚さ2.1cm。凸面は全面11本／3cmの縦方向の繩目タタキが認められ、凹面は摩滅のため不明瞭であるが、右側面側を幅1.0cmヘラケズリを施し、他は布目が残る(縦6本／1cm、横6本／1cm)。広端面及び狭端面はヘラケズリにより内傾する面をなし、側面はヘラケズリを施す。

151は全長36.4cm、狭端幅25.5cm、厚さ2.3cm。凸面は全面12本／3cmの縦方向の繩目タタキが認められ、凹面も全面布目が残る(縦6本／1cm、横7本／1cm)。狭端面は平で、側面はヘラケズリを施す。

152は全長34.3cm、広端幅26.5cm、厚さ2.4cm。凸面は7本／3cmの縦方向の繩目タタキが認められ、凹面は摩滅のため不明瞭であるが、全面布目が残る(縦7本／1cm、横7本／1cm)。広端面及び狭端面はヘラケズリにより内傾する面をなし、側面はヘラケズリを施す。

176は全長36.0cm、中央部で幅27.5cm、厚さ2.3cm。凸面は全面8本／3cmの縦方向の繩目タタキが認められる。凹面は摩滅のため不明瞭であるが、糸切り痕が認められ、左側面側は0.5～0.8cmヘラケズリされていると考えられ、他は布目が残る(縦6本／1cm、横6本／1cm)。広端面及び狭端面はヘラケズリにより内傾する面をなし、側面はヘラケズリを施す。また、凹面の広端部側の端の一部に押さえ込まれて凹んだ状況があり、製作台の端の可能性がある。

以上の半瓦の他に、小型平瓦がある(144～148)。完形の資料はないが、広端幅17.8cm、狭端幅14.0～14.1cmで全長は28cm前後に復原でき、厚さは1.6～1.9cm。摩滅のため不明瞭であるが、残存部分では凸面は全面縦方向の繩目タタキが認められ、凹面は全面布目が残る。凸面の繩目

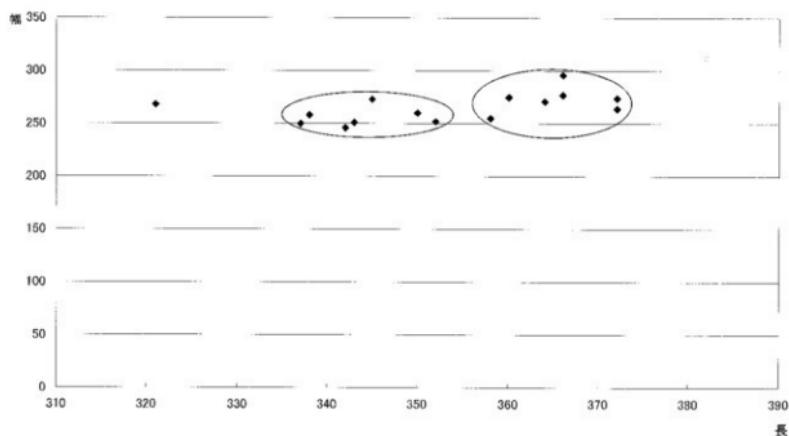
タタキは147は10本／3cm、148は13本／3cm。凹面の布目は144は 縦7本／1cm、横7本／1cm、147は縦8本／1cm、横8本／1cmで糸切り痕が認められ、148は縦7本／1cm、横9本／1cm。

平瓦は側面にまで布目がみられるものが認められること等から一枚作りと判断され、計測可能なものでみると(幅については中央付近の幅でも検討)、全長32.1cm、幅26.8cm(119)、全長33.7～35.2cm、広端幅26.2～26.5、狭端幅22.5～23.9cm、幅24.6～26.6cm(103、104、115、116、117、118、130、152)、全長36.0～37.2cm、狭端幅24.8～25.5cm、幅26.4～29.6cm(105、106、107、151、176)(第10図)と他に全長28cm前後に復元でき、広端幅17.8cm、狭端幅14.0～14.1cmの小型のものがある(144～148)。

また、120～126、133～135、149、150、156のように縦にはば半裁された資料が認められ、これらは熨斗瓦の可能性もあるが、明確に熨斗瓦として加工された状況は認められず、H4分窓、溝1、溝2、溝3出土といった状況からは、平窓の構築材として使用されていた可能性の考えられる資料である。

凸面の縄目タタキは縦方向でほとんどのものが端から端まではば通るものであり、確認できた108点の中では3cm幅で7～16本認められるが、10本及び11本が最も多く45.7%を占め、8～12本で89.7%と大半を占める。最も細かいものは16本が2点、粗いものは7本が3点認められる。また、縦方向の縄目タタキを施した後に、部分的に斜め方向の縄目タタキが認められるものがある(189～193)(第11図)。

凹面の布目は確認できた100点の中では、縦5～12本／1cm、横5～11本であるが、縦6本、横6本のものが最も多く30点、次いで縦7本、横7本が21点、縦6本、横7本が10点、縦6



第10図 平瓦寸法分布図



118

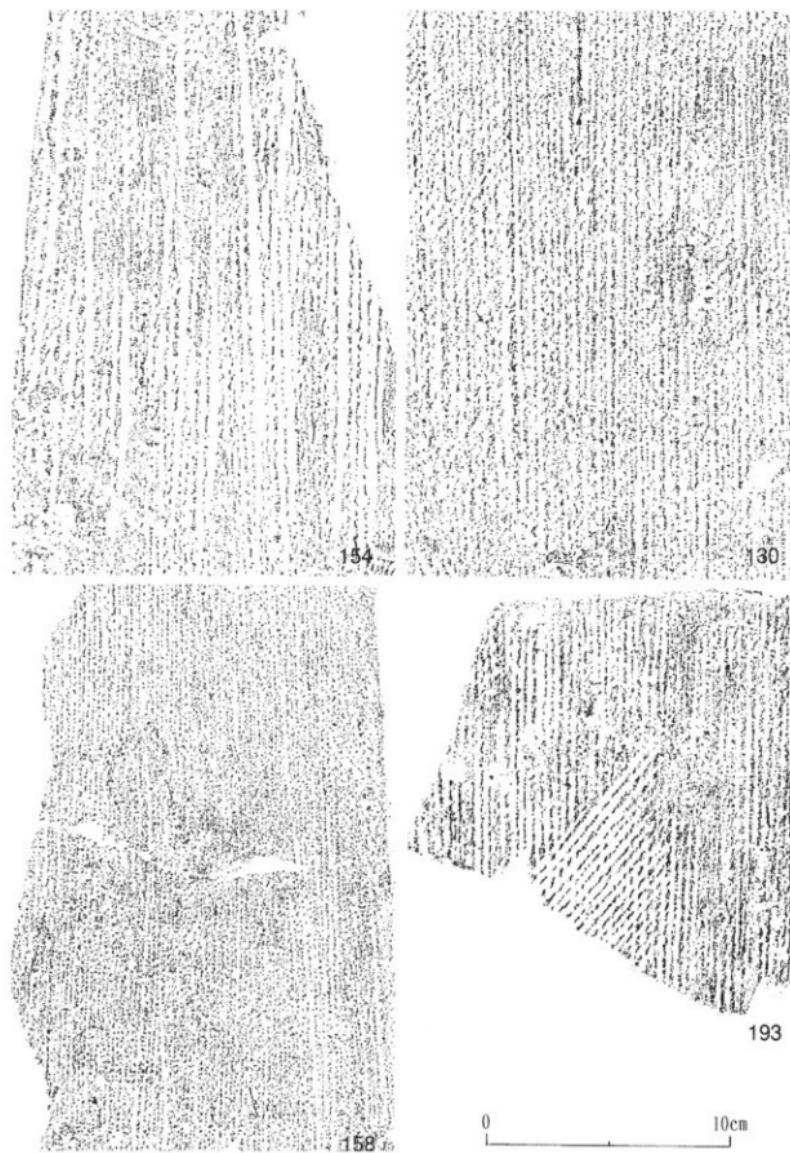


104



121

8 平瓦細部



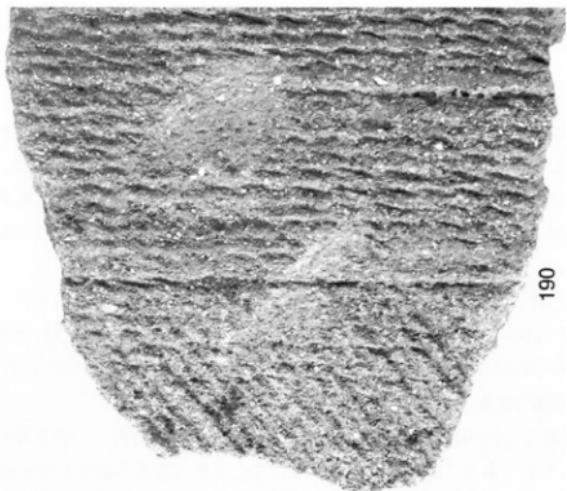
第11図 平瓦凸面網目タタキ

9 平瓦凸面縄目タタキ

189



190



本、横5本が7点である。最も細かいものは縦12本、横10本で、粗いものは縦5本、横5本であるが、確認できたのは各1点である。

側面はヘラケズリされ、凹面に対しては鋭角で凸面に対しては鈍角をなすように整形されたものと両側面が平行になるように整形されたものがある。

## 6. 面戸瓦(図版編 100~102)

3点とも確認調査 T103出土で蟹面戸と考えられるものである。通常の丸瓦筒部を焼成前に面戸瓦に成形したもので、101は平行四辺形状に、100及び102は一端を斜めに切り、直角台形状に成形している。

100は全長15.6cm、幅20.0cm、厚さ2.6cm。凸面はナデにより他の調整は確認できず、凹面は側面側の幅1.5~1.7cm、斜めに切られた端面側の幅1.5~3.5cmはヘラケズリを施し、また、短側面側に0.5cm幅の布端状の窪みが2条みられ、そこから側面にかけては布が被らない状況である。他は布目が明瞭に残っている(縦6本/1cm、横6本/1cm)。須恵質に焼成され、青灰色を呈す。

101は全長25.4cm、幅18.5cm、厚さ2.1cm。凸面のごく一部に縦方向の縄目タタキの痕跡がみられる。凹面は糸切り痕が認められ、ほぼ全面布目が残る(7本/1cm、横7本/1cm)が、側面側のごく一部にナデが施されている。切られた面は強く内傾する面をなす。

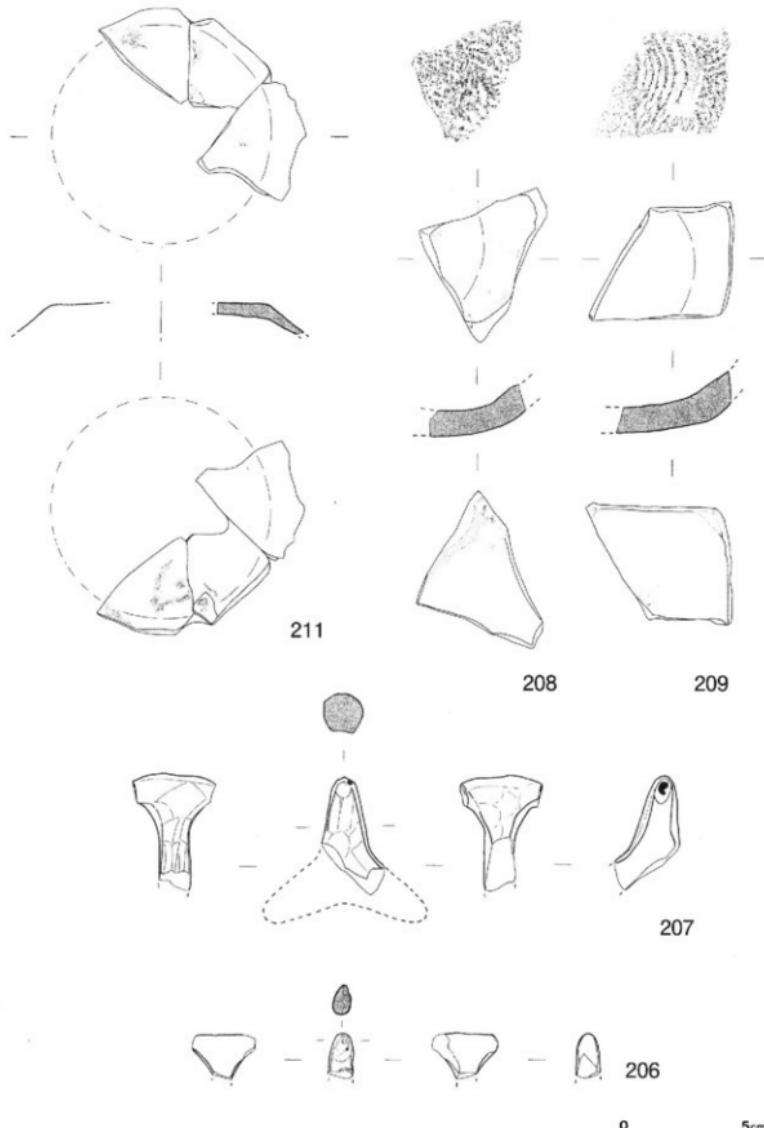
102は全長25.9cm、厚さ1.8cm。凸面の一部に縦方向の縄目タタキの痕跡が認められる。凹面は側面側の幅0.5~0.8cmがヘラケズリを施し、また、残存部分のほぼ中央に縦方向に0.5cm幅の布端状の窪みが2条みられ、その間は布が被らない状況である。他は布目が残る(縦6本/1cm、横7本/1cm)。

## 7. 緑釉点滴瓦、窯道具、その他(図版編 196~209)

緑釉の認められる瓦は確認調査の窯窓調査<sup>14)</sup>で計64点確認された。T101で1点、T103で41点、T104で10点、T105で8点、T106で1点、T107で3点確認され、平瓦が60点、丸瓦が4点であるが、ほとんどが細片である。いずれも部分的に緑釉の点滴が認められるものであり、断面にも緑釉が認められることから、窯の床面に敷かれていたものが焼台として使用されたものと考えられる。

196~201は平瓦(196・197:T103、198・199・201・202:T105、200:T107)、203~205は丸瓦である(203・204:T105、205:T106)。196は平瓦が重なって溶着した状況のものであるが、重なった面の内側にも釉が掛かっている。他はいずれも10cm前後の細片が大半で、203と205は丸瓦の玉縁部である。

206・207は窯道具でT103出土。207は三又トチンで中央から伸びた三つの支脚の先端部に上下に突起が付くものであり、その先端に緑釉が付く。支脚先端を共有する径を復元すると7.6cm前後となる。206は扁平な鼓形を成すものと考えられ、突出部分の先端及び側面に緑釉が付く。



第12図 窯道具等実測図

208・209は須恵器甕でT103出土。厚さ1.1～1.3cmで209は内面に同心円タタキが認められる。内外面及び断面の一部に綠釉の点滴が認められる。211はT101出土で浅鉢形の匣鉢の可能性の考えられるものであるが、やはり内外面及び断面に綠釉の点滴が認められ、208・209と同様に破損品として焼台に利用されたものと考えられる。

## 8. 記号のある瓦(図番編 210)

T 5、溝 1 出土の厚さ1.5cmの平瓦で、凹面の広端部側に一部、二重に重なっている部分があるが、広端部側を上にして「大」字状の陽刻が認められる。

## 第3章　まとめ

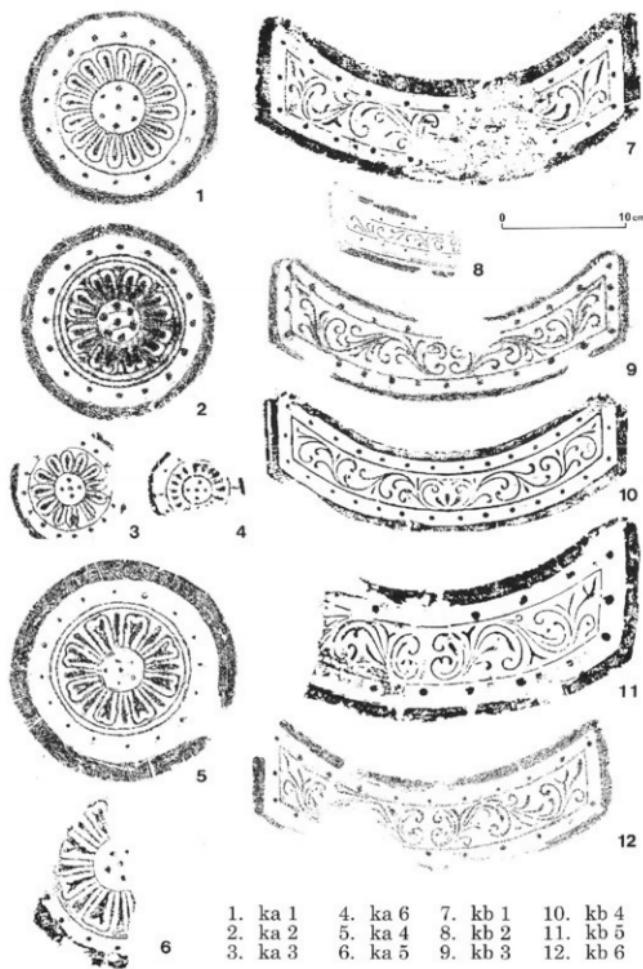
平成19年度の確認調査によって、吉志部神社西側では調査範囲外で確認された2基の平窯を含めて12基の平窯が規則的に配置されていることが明らかとなり、当該地点を含めて東西200mの範囲に窯が展開していることが想定された。未調査地点が多いことから、窯の配置状況や一時期の操業数等について不明な点が多いが、現状で確認されている窯や東西280mにおよぶ工房関連遺構の展開からも、吉志部瓦窯は非常に大規模な操業を行っていた造瓦工房である。

以下、改めて吉志部瓦窯生産の瓦の概要を記すが、整備時の資料を含めて確認調査等の出土資料の多くは吉志部瓦窯操業の最終段階のものと考えられものである。その出土状況は遺構内出土のものについても現位置を保つと考えられるものではなく、平窯背後の溝出土資料にみられるように操業終了後に一時期に廃棄されたものと考えられる。また、これまでの調査では窯の調査が限定されたものであることや、後世の開発に係る造成等のためか、大阪府教育委員会の調査において一部で薄い灰の堆積を確認したことや平成8年度の吉志部神社前面の調査で2次堆積の灰及び焼上の堆積層を確認した以外には明確な灰原は確認されておらず、遺構等からの瓦の生産状況の検討は今後の課題となる。

### 1. 軒丸瓦

まず、大阪府教育委員会による調査を除き、整備時と今回の確認調査及びこれまでの工房跡の発掘調査で確認された点数を型式別にみると、ka1が24点、ka2が30点、ka3が1点、ka4が4点、ka5が2点、ka6が2点であり、ka1とka2が多く、生産の中心であった可能性が高いと考えられる。瓦当の寸法については小型のka3とka6以外ではka1とka2は直径が16.0～16.8cmとほぼ同様であり、ka5も完形品がないがほぼ同様と考えられるのに対して、ka4は天地17.7～17.8cm、左右18.2～18.4cmと大きく、やや楕円形を呈している。

ka1、ka2、ka4の一部に瓦当外周に内凹の紋様と一致するところに一段、範端の痕跡が認められることから、ka1、ka2、ka4については範が瓦当の外周外縁(周縁)外側までかぶるものと



第13図 軒瓦(7・10・11は「岸部瓦窯跡発掘調査概報」より転載)

考えられる(近藤1982)。瓦当と丸瓦部の接合については全て、瓦当裏面の上端よりやや下った部分に丸瓦を当て、上方及び下方に粘土を充填しており、内面の接合線は台形状をなしている。裏面の接合痕をみると外側に向かってやや斜めに窪んだ状況のものとほぼ平らなものがあるが、ka1、ka2では両者が認められる。軒丸瓦は瓦当部分が丸瓦部との接合部で剥離しているものがほとんどであるが、丸瓦部の遺存しているものについては、凸面は縦方向にナデを、凹面は瓦当裏面から接合時の粘土充填部分を縦方向のナデを施し、そこから玉縁にかけては未調整で布目が残る。

瓦当面紋様については、ka1では4・10は蓮弁及び界線の盛り上がりも強く、シャープな状況であるが、11・50・54ではやや盛り上がりが弱くなり、1・7では全体に不鮮明な状況であり、範使用段階の差の可能性が考えられる。ka2は先述したように第2段階～第4段階に当たる3段階の範傷の進行状況の資料が認められる。

ka4は縦釉瓦と考えられるもので、確認調査で出土した57・58には縦釉は認められないが、共に縦釉瓦等の焼成に使用されたと考えられる窯窓周辺調査区の出土であることやその焼成状況からもka4が縦釉瓦として意図されたものであることを示しているものと考えられる。

## 2. 軒平瓦

これまでの確認点数を型式別にみるとkb1が4点、kb2が4点、kb3が8点、kb4が11点、kb6が2点であり、kb4が最も多くkb3が次ぐが、確認点数は軒丸瓦のおよそ1／2である。

kb3に部分的な痕跡ではあるが瓦範が瓦当の外区外縁部分までのものと考えられる資料がある(45)。平瓦部の調整は摩滅のため不明瞭であるが、凸面は縦方向のヘラケズリを施すものが多く、62は狹端面近くの一部に布目が認められる。また、部分的にではあるが繩目タタキの認められるものがある(44・48)。

吉志部瓦窯で生産された軒瓦については大阪府教育委員会の調査以降、市教育委員会による工房跡の調査において新たな瓦範資料を確認し、現在、軒丸瓦6型式、軒平瓦6型式が確認されている。一方、同じ平安宮初期の瓦窯である西賀茂瓦窯では軒丸瓦23型式、軒平瓦13型式が、大山崎瓦窯では軒丸瓦10型式、軒平瓦10型式が確認されており、吉志部瓦窯はその操業規模に比べて軒瓦の種類は少なく、未確認のものを考慮する必要もあるが、大幅に増える可能性は少ないと考えられ、特定のものを集中的に生産したものと考えられる。

## 3. 丸瓦

丸瓦は確認調査時の遺構出土の点数は57点で、平瓦のおよそ1／30である。寸法からみると丸瓦は大きく2種類に分けられる。

- ①全長29.5cm、広端幅13.5cm
- ②全長35.4～37.7cm、広端幅15.9～16.3cm

但し、①は確認されたのは1点のみで、他は②である。厚さは1.2～2.0cmであるが、①と②による違いは認められず、②では概ね寸法に比例するが、個体差があり、1.5～1.7cmのものが多い。88は厚さ1.2cmで、確認された中では最も薄く、さらに類例が確認されれば、薄手の丸瓦としての位置づけが可能となろう。また、玉縁も②で5.0～7.3cmと差が大きい。

筒部凸面の繩目タタキは確認できたのは10点で、それも部分的に確認できたものであるが、3cm×3cmの範囲に5粒で9・10本が半数を占める。凹面は布目が全面に残るものと広端側を0.5～2.0cmをヘラケズリして布目を消すものが大半を占め、他に広端及び狭端側をヘラケズリするもの、狭端側のみをヘラケズリするものがあるが、確認できたものは1点ずつである。

布目は21点の資料では1cmの範囲で縦7本、横6及び7本のものがほぼ半数を占める。最も粗いものは縦6本、横5本で3点、最も細かいものは縦8本、横8本で2点確認された。

また、凹面全面に糸切り痕が認められるものがあり(87：糸切り痕A Dr 94：糸切り痕A Ur 大脇2004)、一枚の粘土板により成形された資料である。

筒部側面はヘラケズリされており平らなものと凹面側をおよそ0.5～1.0cm幅で面取するものがあり、玉縁の大半は凹面側を面取りし、底面を筒部狭端部側からヘラケズリにより面を持つものが多い。

#### 4. 平瓦

平瓦は確認調査時の遺構出土の点数は1822点で、確認調査時の出土資料の中で最も多く、中でも平窯背後の東西方向の溝1からの出土点数は1255点と多数を占める。また、側面にまで布目が認められるものや凹面の側面近くに成形台の端痕の認められるものがあることから凸形台による一枚作りと考えられる。

寸法からみると、今回の報告分で全容がわかるものでは4種類に分けられたが、平成3年度の工房跡の調査でこれらよりも大型のものが確認されており、平瓦は寸法からは5種類に分けられる(第14図：②～⑤)。確認できた資料の中では③と④が主で、②と⑤は各1点であり、①は1／2程度の破片が7点である。

①全長28cm前後に復元、広端幅17.8cm、狭端幅14.0～14.1cm、厚さ1.6～1.9cm

②全長32.1cm、中位幅26.8cm

③全長33.7～35.2cm、広端幅26.2～26.5cm、狭端幅22.5～23.9cm

④全長36.0～37.2cm、中位幅26.4～29.6cm、狭端幅24.8～25.5cm、

⑤全長38.2cm、広端幅32.6cm

厚さ及び弧深は①は厚さ1.6～1.9cm、弧深2.2～2.3cm、②は厚さ1.7cm、弧深2.3cm、③は個体差が大きく厚さ1.6～2.7cm、弧深4.3～5.5cm、④は厚さ2.3cmを中心に2.0～2.4cm、弧深3.9～5.1cm、⑤は厚さ2.7cm、弧深4.0cmである。

凸面は少量、縦方向の繩目タタキ後、部分的に狭端面を上にして右上がりの斜め方向の繩目タタキを施すものが認められるが、ほとんどが全面縦方向に端から端まで通る繩目タタキが施

第14圖 平瓦 (119:② 115:③ 106:④ SK213:⑤)

30cm

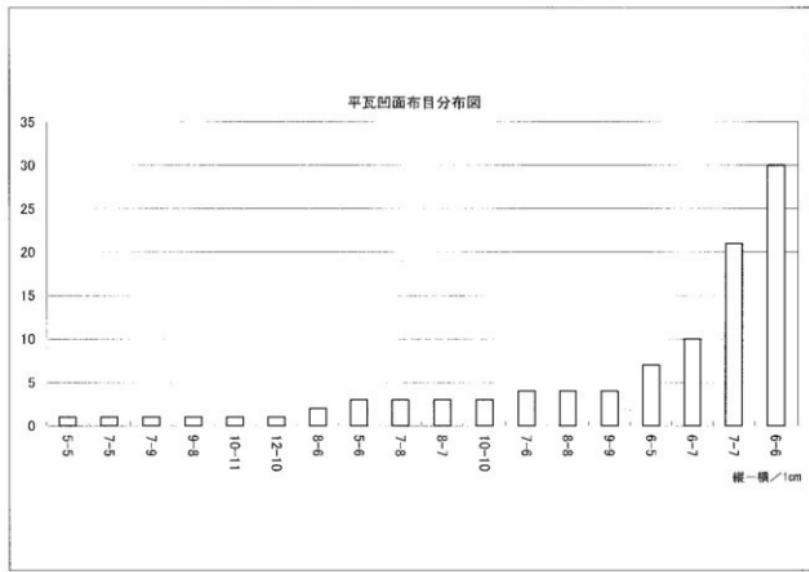
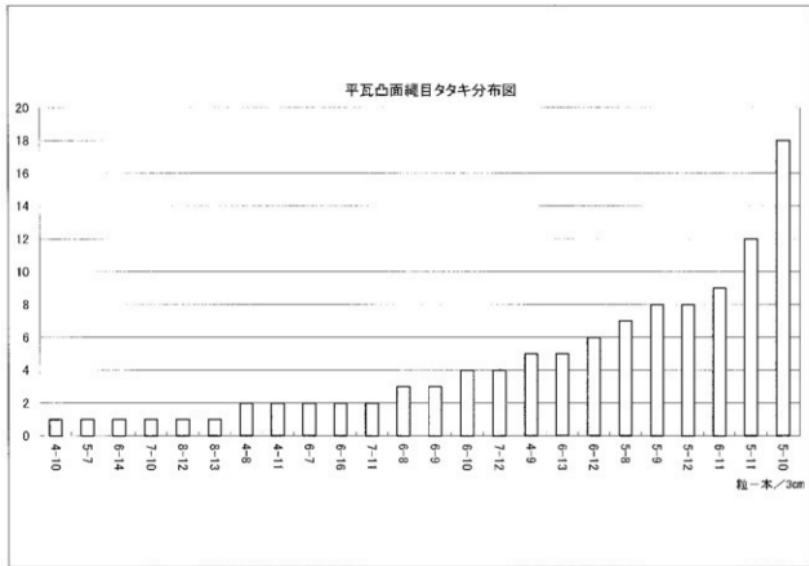
H3 調査 D区 SK213

106



115

119



第15図 平瓦凸面縄目タタキ・平瓦凹面布目分布図

されている。また、138・179のように縄目タタキが幅5cm前後で深くなっているものがあり、他にも同様の幅でタタキの方向がやや異なるものがある(126・130・140・155・156・164)ことから、タタキの単位の可能性が考えられる。

また、縄目タタキは3cm×3cmの範囲に5・6粒で8～12本が大半を占め、最も細かいものは6粒で16本、粗いものは5及び6粒で7本である。

凹面は大半のものが広端部、狭端部及び両側面側を幅0.5～1.0cmへラケズリしており、布目は1cm×1cmの範囲で縦6・7本、横5～7本が大半を占め、最も細かいものは縦12本、横10本、粗いものは縦5本、横5本である。

また、凹面に全面に糸切り痕の認められるものがあり、平瓦の多くは一枚の粘土板で成形されたものと考えられ、糸切り痕AでUlが9点、Urが10点、Dlが2点、Drが3点認められ、確認調査時出土のものは16点であるが、遺構等ごとの規則性は認められない。

##### 5. 緑釉瓦・窯道具

吉志部瓦窯で焼成された緑釉瓦については軒丸瓦ka4が吉志部瓦窯で採集資料として、軒平瓦kb5が平安京大極殿周辺で緑釉の施されたものが確認されている。但し、これまでの瓦窯の調査では確認されていないため詳細は明らかでないが、確認調査で確認したka4は窯窓の調査区で確認されており、さらに焼成も須恵質で他よりも硬質である。また、ka4は他の軒丸瓦よりも大きく、kb5も軒平瓦の中では他よりも大きなものであり、焼成された瓦の中では最も大きなものとなり、セット関係が想定される。

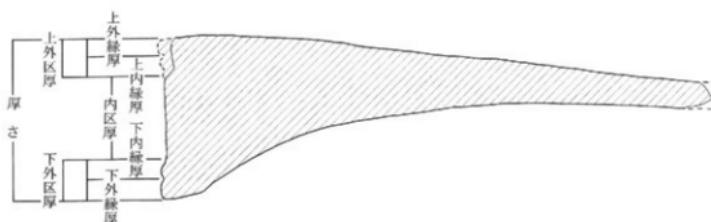
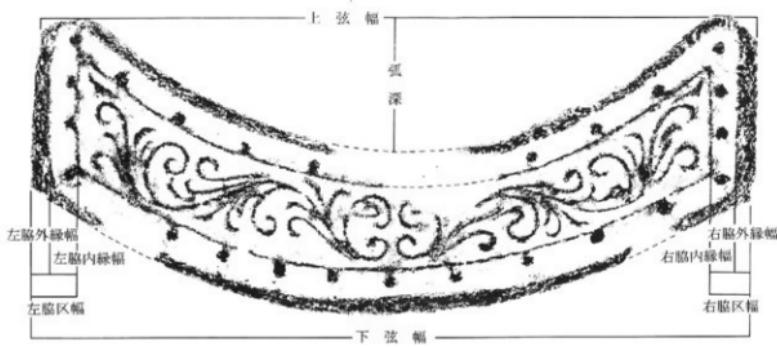
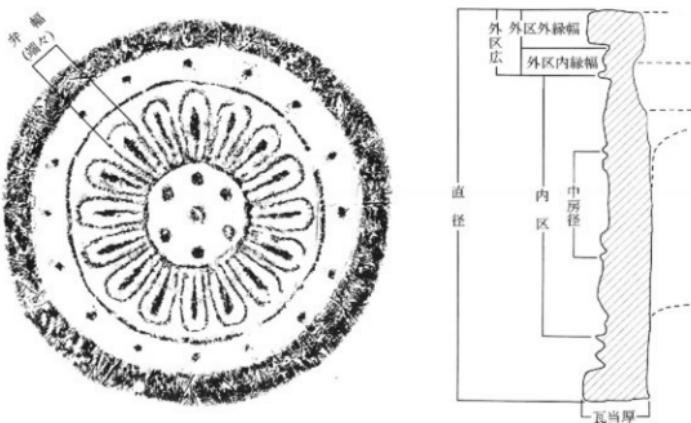
また、平成3年度の工房跡の調査ではD区SK215から丸瓦(『吉志部瓦窯跡(工房跡) P70 6』)を確認している。広端部側の破片であるため全長は不明であるが、幅16cm(復原値)、厚さ1.9cm。残存部の凸面全面及び先端面の一部に流れた状況で暗緑色の釉が厚く施釉されている。施釉されていない凹面の色調は淡茶灰色で、素焼きの状態であるが堅緻であり、調整は他の丸瓦と同様である。

緑釉陶器については、確認調査で緑釉の点滴が認められる須恵器壺の細片等が認められるが断面にも緑釉が認められることから、製品ではなく焼台等に使用されていたものと考えられ、市教育委員会によるこれまで調査では製品は確認されておらず、その実態は不明である。

窯道具は大阪府教区委員会の調査を含めると、三叉トチン、六脚トチン、扁平な鼓形トチンの3種類のトチンがほぼ同数認められる(『図版編 カラー図版』)。また、明確な匣鉢は確認されていないが、確認調査で確認された211は緑釉の点滴状況から焼台等に使用されていたと考えられるものであるが、淺鉢形の匣鉢の可能性も考えられ、大阪府教育委員会の調査で確認された資料の中にも同様のものが認められる。

## 参考文献

- 網伸也2005 「平安宮造営と瓦生産」「古代文化」第57巻第11号 財團法人古代學協會
- 大阪府教育委員会1968 「岸部瓦窯跡発掘調査概報」
- 大阪府教育委員会1986 『節・香・仙』第40号
- 大阪府教育委員会1996 『新庄遺跡』
- 大阪府教育委員会1999 『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報』2
- 大阪府建築部・大阪府教育委員会・吹田市教育委員会1987 『吉志部瓦窯跡』
- 大山崎町教育委員会2010 『大山崎町文化財情報』2008
- 大脇潔2004 「創建期平瓦の製作技法」「志筑廃寺発掘調査報告VOL.1』津名町教育委員会
- 財團法人大阪府文化財センター 2008 『吹田操車場遺跡Ⅲ』
- 財團法人大阪府文化財センター 2010 『吹田操車場遺跡Ⅳ』
- 財團法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991 「長岡京左京第252次発掘調査概要」「京都府遺跡調査概報第43冊」
- 財團法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1996 「長岡京左京第353次発掘調査概要」「京都府遺跡調査概報第69冊」
- 古閑正浩2004 「廃都後における長岡京地の再編と瓦」第56巻第8号 財團法人古代學協會
- 古閑正浩2010 「河内百濟寺の造瓦組織と王權」「ヒストリア」第221号 大阪歴史学会
- 近藤喬一1981 「瓦の范と瓦当」「考古学論考」小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会
- 財團法人古代學協會1978 『平安京跡研究調査報告第4輯 西賀茂瓦窯跡』
- 吹田市・吹田市教育委員会・関西大学考古学研究室1973 『吉志部古墳発掘調査報告』
- 吹田市教育委員会1987 『昭和61年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』
- 吹田市都市整備部・吹田市教育委員会1998 『吉志部瓦窯跡(工房跡)』
- 吹田市建設緑化部・吹田市教育委員会2004 『紫金山公園整備に伴う埋蔵文化財調査報告書』
- 吹田市建設緑化部・吹田市教育委員会2011 『紫金山公園整備に伴う埋蔵文化財調査報告書』2
- 吹田市史編纂委員会1981 『吹田市史』第8巻
- 鍋島敏也1964 「吉志部瓦窯址発見の瓦」「古代学研究」第38号 古代学研究会
- 財團法人東大阪市文化財協会1988 『若江遺跡第27次発掘調査報告書』
- 福永信雄1989 「若江寺 若江城 古瓦譜」若江城研究会発表資料
- 藤澤一夫1941 「揖河泉出土古瓦の研究」「佛教考古学論叢」考古学評論第3輯 東京考古学会
- 藤澤一夫1967 「造瓦技術の進展」「日本の考古学」VI 河出書房



軒瓦部分名称

## 軒丸瓦

寸法:mm、(残存值)

No.	調査等	出土地点	型式	埴延(天地)	置保(左右)	瓦当面	内区			外区			色調
							径	中房径	通子数	幅	外縁幅	外縁高	
1	整備時	kai	163	165	30	108	43	1+6	13	12	15	13	褐色 にぶい黄緑
2	整備時	kai			32	42			13	12	15	14	浅黃 明黄鵠
3	整備時	kai			30	107	44	1+6	15	12	15	8	灰白 淡青灰
4	整備時	kai	160	160	32	107	44	1+6	15	12	15	8	暗青灰 灰白
5	整備時	kai			28	108	46		13	12	15	9	灰白 黑褐
6	整備時	kai			26	108	45	1+6	14	13	16	7	黑褐 灰白
7	整備時	kai	163	163	28	108	45	1+6	16	12	15	14	灰 灰白
8	整備時	kai			26	108			14	12	15	8	オリーブ黒 淺黃
9	整備時	kai			26	108			15	13	17	7	暗灰 浅黃
10	整備時	kai		162					14	12	14	8	暗青灰 灰白
11	整備時	kai	164		108	43			14	14	15	10	オリーブ灰 暗青灰
12	整備時	ka2	166	28	108	37	1+6		25	12	19	8	暗青灰 灰白
13	整備時	ka2	168	164	28	108	38	24	11	17	8	暗青灰 灰白	
14	整備時	ka2	168	(162)	30	108	38	1+6	24	11	16	8	暗青灰 灰白
15	整備時	ka2			30	108	38	1+6	24	11	16	8	暗青灰 灰白
16	整備時	ka2			28	108	38	1+6	24	11	16	8	灰 にぶい黄緑
17	整備時	ka2			28	108	38	1+6	25	12	17	8	灰 にぶい黄緑
18	整備時	ka2			165	108	38	1+6	25	12	18	暗灰 にぶい黄緑	
19	整備時	ka2	165	165	28	108	38	1+6	25	12	16	8	暗青灰 灰白
20	整備時	ka2	162	161	34	108	38	1+6	25	11	16	8	暗青灰 灰白
21	整備時	ka2	164	160	32	108	37	1+6	24	11	16	9	暗灰 にぶい黄緑
22	整備時	ka2	162	162	32	108	38	1+6	24	12	16	9	青灰 にぶい黄緑
23	整備時	ka2	166	164	30	110	38	1+6	24	11	16	9	灰 にぶい黄緑
24	整備時	ka2	163	162	28	108	38	1+6	24	12	15	8	黑褐 にぶい黄緑
25	整備時	ka2	164	161	28	108	37	1+6	24	12	15	8	灰 にぶい黄緑
26	整備時	ka2	166	164	30	111	38	1+6	24	12	16	8	灰 にぶい黄緑
27	整備時	ka2	164	28	108	38	1+6	25	12	16	8	灰 にぶい黄緑	
28	整備時	ka2	163	164	30	108	38	1+6	24	11	15	6	オリーブ黒 淺黃
29	整備時	ka2	(161)		108	36			24	11	17	8	灰 にぶい黄緑
30	整備時	ka2			30	106			12	15	8	暗青灰 灰白	
31	整備時	ka2							23	12	16	8	暗青灰 灰白
32	整備時	ka2		(161)	34	108	38	1+6	24	12	16	7	浅黃 にぶい黄緑
33	整備時	ka2			28				25	12	19	8	灰 にぶい黄緑
34	整備時	ka2			26				25	12	19	8	灰白 にぶい黄緑
35	整備時	ka2			168				25	11	20	9	灰 にぶい黄緑
36	整備時	ka4			34				19	15	19	14	青灰 青灰
37	整備時	ka5			34				23	14	17	12	黄灰 浅黃

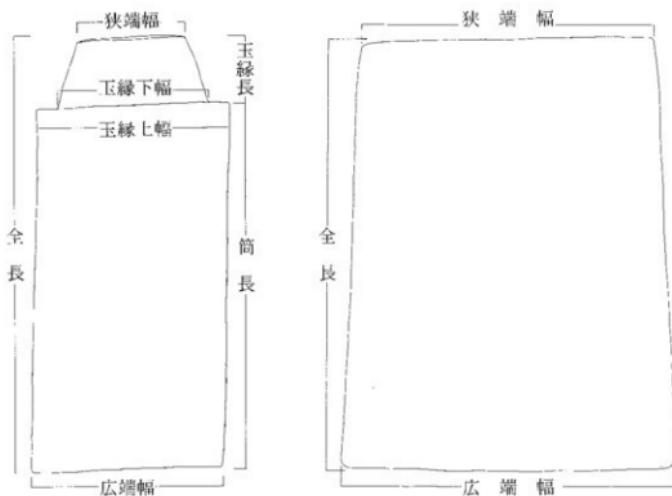
## 野丸瓦

寸法:mm、(残存部)

NO.	調査等	出土地点	型式	曲率(天地)	直径(左右)	耳当厚	内区			外区			寸法:mm	
							深	中房	漸子数	升幅	内縫幅	外縫幅		
38 整備時			ka3	102	22	66	27	1+4	10	8	8	16	18	12 黄灰
39 整備時			ka1	167	166	26	110	44	1+6	13	8	19	9	6 オーブ黒 灰黄
50 5次調査 T5、満1			ka1							12	15	10 オーブ黒 オーブ黒		9 オーブ黒 灰黄
51 5次調査 T9、満3			ka1							14	13	10 暗灰 褐色		9 にぶい黄 にぶい黄
52 5次調査 T4、満1			ka1							13	15	10 暗灰 褐色		9 にぶい黄 にぶい黄
53 5次調査 T9、満3			ka1							13	15	10 暗灰 褐色		9 にぶい黄 にぶい黄
54 5次調査 T9、満3			ka1	167	164	28	113	44	1+6	13	12	16	9 オーブ黒 オーブ黒	9 オーブ黒 暗青灰
55 5次調査 T5、満1			ka1							12	15	9 暗青灰 暗青灰		9 暗青灰 暗青灰
56 T3、満2			ka2							24	12	18	10 灰 灰	9 灰 灰
57 5次調査 T103、81番			ka4	177	184	34	111	38	1+5	19	14	20	12 緑灰 反赤	9 緑灰 反赤
58 5次調査 T100、83番			ka4	178	182	32	110	37	1+5	19	16	18	12 明青灰 青灰	9 明青灰 青灰
68 5次調査 T9、満3													9 黒鵝 燈	9 黒鵝 燈
69 整備時													9 暗灰黃 黄灰	9 暗灰黃 黄灰
70 整備時													9 にぶい黄 にぶい黄	9 にぶい黄 にぶい黄

## 斜平瓦

NO.	調査等	出土地点	型式	上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	内区厚	上外区	外縫幅	内縫厚	外縫幅	内縫幅	右脇区			寸法:mm
														凸面	凹面	色調	
40 整備時			kb2				48	15	9	8	8	8	8	8	8	8 オーブ黒 黒	8 オーブ黒 黒
41 整備時			kb1					34			15	10					8 オーブ黒 黒
42 整備時			kb6				80	36	11	9	12	11					8 オーブ黒 黒
43 整備時			kb1				76	34	13	8	13	8	9	9			8 オーブ黒 黒
44 整備時			kb3	292	53	290	67	34	6	8	10	8	9	9	9		8 オーブ黒 黒
45 整備時			kb3				58	30			11	9			9		8 オーブ黒 黒
46 整備時			kb3				39							9			8 オーブ黒 黒
47 整備時			kb4											9			8 オーブ黒 黒
48 整備時			kb3	300	52	293	53	29	5	10	5	10		9	9	9	8 オーブ黒 黒
49 5次調査 T7			kb4					37	13	10							8 オーブ黒 黒
59 5次調査 T7			kb1				46	15	4	3	12	7	7	7	7		8 オーブ黒 黒
60 5次調査 T7			kb2				70	33	9	9	11	8					8 オーブ黒 黒
61 5次調査 表裸			kb3				63	37	9	7		9	9				8 オーブ黒 黒
62 5次調査 T5、満1			kb4				64	30	11	9							8 オーブ黒 黒
63 5次調査 T5、満1			kb4				69	31	10	9	9	10					8 オーブ黒 黒
64 5次調査 T3			kb4				66	28	11	8	9	10					8 オーブ黒 黒
65 5次調査 T7			kb4				71	31	10	9	12	9					8 オーブ黒 黒
66 5次調査 T4、満1			kb4				55	295	75	35	12	9	12	9	12	9	8 オーブ黒 黒
67 5次調査 T9、満3			kb6	278													8 オーブ黒 黒



丸瓦, 平瓦 部 分 名 称

NO.	調査点	出土地点	全長	筒長	玉縁長	広幅端	玉筋上端	玉筋下端	狭幅端	寸法mm、(廻原他)、(廻存道)、(廻原他)、(廻存道)		
										凸面	凹面	断面色
77	整備時	295	264	31	135	132	107	83	18	5	灰	灰白
78	整備時	358	300	53	159	158	123	89	16	8	灰	暗青灰
79	整備時	377	319	58	[162]	160	131	85	20	6	5	灰
80	整備時	(329)	(269)	60	(145)	(127)	(73)	(15)	(73)	7	7	灰
81	整備時	(265)	(199)	66	(112)	(94)	(67)	(17)	(17)	6	6	オリーブ褐
82	整備時	(193)	(139)	54	150	129	96	17	7	7	6	暗緑灰
83	整備時	(207)	(151)	56	150	117	83	14	7	5	灰	にぶい黄緑
84	整備時	(234)	(170)	64	(155)	118	84	13	6	灰	灰白	淡黃
85	整備時	(190)	(131)	59	161	129	95	15	7	7	6	黒
86	整備時	(181)	(125)	56	166	(129)	(43)	14	6	6	黄灰	にぶい黄緑
87	5次調査 T3、H4	365	306	59	(80)	154	119	88	18	5	10	灰白
88	5次調査 T3、H4	374	316	58	(47)	146	(118)	81	12	5	9	灰白
89	5次調査 T3、H4	(219)	(206)	73	(145)	127	90	20	5	9	6	暗灰
90	5次調査 T3、H4	(230)	(171)	59	164	139	91	17	7	6	灰	淡黃
91	5次調査 T6	(208)	(144)	64	154	120	90	13	5	9	7	明オーブ灰
92	5次調査 T4、溝1	(351)	(298)	53	(140)	133	97	19	6	5	灰	灰白
93	5次調査 T4、溝1	(286)	(222)	64	163	(127)	(59)	18	6	6	6	黄灰
94	5次調査 T5、溝1	359	309	50	(134)	152	116	80	15	6	11	灰
95	5次調査 T5、溝1	354	297	57	[163]	156	124	80	13	6	12	灰
96	5次調査 T5、溝1	(310)	(312)	58	(52)	161	132	(41)	17	7	6	暗灰
97	5次調査 T5、溝1	(377)	(317)	62	(33)	(222)	(195)	(47)	17	6	11	8
98	5次調査 T5、溝1	(361)	(42)	(143)	155	(115)	(47)	15	5	11	8	明オーブ灰
99	5次調査 T5、溝1	371	304	67	163	156	123	90	16	5	10	7

NO.	調査等	出土地點	全長	広邊幅	狭端幅	断面図	厚	寸法mm. (残存部)、[復原値]、印		凹面色	凸面色	布目	タガ	布目	タガ	本/1cm
								横溝印(右)	縦溝印(左)							
103	調査等	溝	350	265	235	260	23	52	7	11	6	6	7	6	7	4.7
104	整備時		349	(218)	(90)	266	21	44	5	10	6	6	7	6	7	4.7
105	整備時		312	(138)	248	264	20	39	5	10	7	7	8	7	8	4.7
106	整備時		346	(254)	(260)	23	44	5	10	6	6	6	6	6	6	4.7
107	整備時		372	(171)	(171)	274	24	43	5	9	7	7	8	7	8	4.7
108	整備時		355	(197)	(177)	(216)	25	47	6	9	8	8	8	8	8	4.7
109	整備時		262	(109)	(132)	275	23	43	5	10	6	6	7	6	7	4.7
110	整備時		320	(220)	(220)	274	25	44	5	12	6	6	7	6	7	4.7
111	整備時		158	191	191	17	33	5	12	6	6	7	6	7	6	4.7
112	整備時		350	(135)	(102)	(148)	25	5	10	6	6	6	6	6	6	4.7
113	整備時		230	(85)	(105)	(153)	27	5	8	7	7	7	7	7	7	4.7
114	江津所調査		266	(173)	(172)	(172)	26	5	10	8	8	8	8	7	7	4.7

平瓦	寸法mm、(現存地)、〔復原地〕、〔残存地〕、〔復原他〕、〔叩〕 3×3cm、布目 本/1cm										
	NO.	調査等	出土土地点	全長	広端幅	狭端幅	断面幅	厚	断面率	布目	タテ
1115次調査 T3-H4	337	262	225	250	18	52	6	10	6	7	7
1116次調査 T3-H4	338	277	97	258	52	6	10	6	5	7	7
1117次調査 T3-H4	345	(210)	(114)	252	25	60	4	9	9	9	9
1118次調査 T3-H4	342	(156)	237	246	16	55	4	8	7	7	7
1119次調査 T3-H4	321	(167)	(115)	268	17	23	7	12	8	6	8
1120次調査 T3-H4	341	(180)	(105)	(180)	21	8	12	6	6	6	6
12115次調査 T3-H4	338	(155)	(119)	(159)	20	5	9	6	7	7	7
122125次調査 T3-H4	361	(88)	(136)	(156)	19	5	10	6	6	6	6
123125次調査 T3-H4	357	(145)	(55)	(141)	21	5	8	7	7	7	7
124125次調査 T3-H4	336	(104)	(44)	(44)	20	5	12	7	6	6	6
125125次調査 T3-H4	315	(130)	(121)	(171)	29	7	12	6	6	6	6
126125次調査 T3-H4	367	(92)	(113)	(130)	25	6	8	6	5	5	5
127125次調査 T3-H4	(303)		(67)	(138)	21	5	11	5	6	6	6
128128次調査 T3-H4	(221)		(190)	(135)	21	5	7	6	6	6	6
129129次調査 T3-H4	(257)		(145)	(122)	21	5	10	9	9	9	9
130130次調査 T4-溝1	352	(239)	239	252	21	43	5	11	6	6	6
131131次調査 T4-溝1	(333)	(230)	(250)	21	41	6	10	6	6	6	6
132132次調査 T4-溝1	332	(120)	(169)	(210)	25	6	10	6	5	5	5
133133次調査 T4-溝1	334	(105)	(108)	(161)	25	4	11	6	5	5	5
134134次調査 T4-溝1	(221)		(127)	(112)	23	6	14	6	6	6	6
135135次調査 T4-溝1	380	(123)	(98)	(146)	23	5	11	6	6	6	6
136136次調査 T4-溝1	(255)		(230)	(240)	22	44	4	9	5	5	5
137137次調査 T4-溝1	(218)		(245)	(254)	26	42	5	11	9	8	8
138138次調査 T4-溝1	(222)		(178)	(264)	26	52	5	11	8	8	8
139139次調査 T4-溝1	(185)		(260)	(260)	27	33	4	10	6	7	7
140140次調査 T4-溝1	(241)	260	255	20	48	5	10	6	6	6	6
141141次調査 T4-溝1	(208)	(110)	(217)	24	5	11	7	7	7	7	7
142142次調査 T4-溝1	(210)	(160)	(225)	20	6	8	6	7	7	7	7
143143次調査 T4-溝1	(130)	(170)	(206)	24	4	9	6	6	6	6	6
144144次調査 T4-溝1	(149)	(185)	(174)	18	22	6	11	7	7	7	7
145145次調査 T4-溝1	(135)	(178)	(169)	16	23	5	11	9	9	9	9
146146次調査 T4-溝1	(118)		(82)	(163)	18	23	5	10	8	8	8
147147次調査 T4-溝1	(80)		(140)	(164)	16	22	5	11	8	8	8
148148次調査 T3-溝2	(155)		(141)	(160)	19	22	6	13	7	9	9
149149次調査 T3-溝2	(110)	(63)	(120)	19	5	9	6	6	6	6	6
150150次調査 T3-溝2	(75)	(135)	(140)	21	5	11	6	6	6	6	6
151151次調査 T9-溝3	364	(125)	(255)	271	23	41	6	12	6	7	7
152152次調査 T9-溝3	343	265	(111)	251	24	46	6	7	7	7	7

NO	調査番号	出土地点	全長	広端幅	狭端幅	厚	基盤面積(合面面積)		寸法mm.	布目	タコ布目	凸面色	凹面色	断面色
							(cm)	(cm)						
153	5次調査	T9、溝3	(254)	(268)	300	28	46	12	6	にぶい緑	灰白	灰白	灰白	灰白
154	5次調査	T9、溝3	334	(150)	(95)	19	6	7	8	6	緑	緑	緑	灰白
155	5次調査	T9、溝3	350	(140)	(74)	(160)	23	5	10	6	6	緑	緑	灰白
156	5次調査	T9、溝3	(290)9		(124)	22	5	11	6	6	灰白	灰白	灰白	にぶい黄緑
157	5次調査	T5、溝1	297	(153)	(178)	25	6	12	7	8	灰白	灰白	灰白	にぶい黄緑
158	5次調査	T5、溝1	(325)		(121)	(155)	22	6	16	12	10	灰白	灰白	オリーブ灰
159	5次調査	T3	(129)	271	266	22	55	5	8	6	6	灰白	灰白	灰白
160	5次調査	T5、溝1	(214)	243	243	22	50	5	8	6	6	灰白	灰白	灰白
161	5次調査	T5、溝1	(202)	232	239	17	48	6	11	5	5	灰白	灰白	灰白
162	5次調査	T5、溝1	(172)	246	255	22	53	4	9	7	7	灰白	灰白	灰白
163	5次調査	T5、溝1	(321)	263	262	29	35	5	8	6	6	灰白	灰白	灰白
164	5次調査	T5、溝1	(236)	253	248	24	40	6	9	6	6	浅黄	浅黄	淺黃
165	5次調査	T5、溝1	(221)	246	264	22	44	5	8	8	8	浅黄	浅黄	灰白
166	5次調査	T5、溝1	(216)	272	262	22	46	5	11	6	6	灰白	灰白	灰白
167	5次調査	T5、溝1	(191)	225	240	21	44	5	11	10	10	灰白	灰白	灰白
168	5次調査	T5、溝1	(185)	(135)	186	17	28	5	10	6	5	灰白	灰白	灰白
169	5次調査	T5、溝1	(115)	(145)	(171)	16	5	10	7	5	灰白	灰白	灰白	にぶい緑
170	5次調査	T5、溝1	338	(93)	(60)	(162)	25	5	12	6	6	灰白	灰白	灰白
171	5次調査	T6	(340)	(62)	150	29	6	13	10	10	10	にぶい緑	浅黄	淺黃
172	5次調査	T6	(344)	(188)	(195)	26	8	13	9	9	浅黄	浅黄	浅黃	灰白
173	5次調査	T6	345	(185)	(115)	(126)	27	5	10	10	10	灰白	灰白	灰白
174	5次調査	T6	357	(120)	(105)	(156)	24	5	10	6	7	にぶい黄緑	にぶい黄緑	にぶい黄緑
175	5次調査	T6	371	(178)	(110)	(153)	18	6	16	10	11	灰白	灰白	灰白
176	5次調査	T7	360	(230)	(142)	275	23	51	4	8	6	6	灰白	灰白
177	5次調査	T7	354	(47)	(160)	(116)	24	6	11	6	6	灰白	灰白	灰白
178	5次調査	T7	(332)	(116)	(45)	(126)	19	5	9	5	6	青灰	青灰	青白
179	5次調査	T8、土坑	(228)	264	(265)	23	45	6	13	7	7	灰白	灰白	灰白
180	5次調査	T5、溝1	(176)		(145)	25	6	11	7	7	灰白	灰白	灰白	灰白
181	5次調査	T103	(173)	270	265	18	33	6	11	7	7	赤褐	赤褐	赤褐
182	5次調査	T103	(185)	264	259	23	45	6	11	7	7	赤褐	赤褐	赤褐
183	5次調査	T103	(210)	282	268	24	42	6	12	6	7	にぶい緑	にぶい緑	にぶい緑
184	5次調査	T103	(104)	270	259	21	33	6	9	8	7	檜	檜	淺黃檜
185	5次調査	T103	(112)	246	240	21	44	6	13	7	7	檜	檜	淺黃檜
186	5次調査	T103	(146)		221	225	23	34	5	9	6	6	にぶい緑	にぶい緑
187	5次調査	T103	(151)		248	18	37	7	12	6	6	灰白	灰白	灰白
188	5次調査	T103	(133)	250	253	20	30	7	12	7	7	浅黄	浅黄	淡赤檜
189	5次調査	T6	(339)	(216)	(208)	27	5	8	7	7	暗灰	暗灰	暗灰	灰白
190	5次調査	T3、H4	(133)	(136)	(22)	4	9	7	8	綠灰	綠灰	綠灰	綠灰	綠灰

寸法mm. (残存値)、[復原値]、[回面色]、布目 本/1cm								
NO.	調査等	出土地点	全長	広端幅	狭端幅	断面図 (粗末断面)	厚	粗末断面
191	5次調査	T3, H4	(160)		(143)	22	5	10
192	5次調査	T8	(220)		(126)	25	6	13
193	5次調査	T3	(170)	(120)	(165)	24	6	8
194	5次調査	T4, 港1	(65)		(93)	22	6	12
195	5次調査	T6	(190)		(154)	25	5	9
196	5次調査	T103	(124)		(102)	19	6	11
196	5次調査	T103	(170)		(235)	(261)	21	6
197	5次調査	T103	(55)			19	6	12
198	5次調査	T105	(57)			19	5	10
199	5次調査	T105	(79)			17	5	9
200	5次調査	T107	(51)			18	7	10
201	5次調査	T103	(40)			17	6	11
202	5次調査	T105	(80)			19	5	12
210	5次調査	T5, 港1	(247)		(60) (133)	15	6	10

# 報告書抄録

ふりがな	きしへがようせき
書名	吉志部瓦窯跡
副書名	出土瓦整理報告書
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	増田真木
編集機関	吹田市教育委員会
所在地	〒564-8560 吹田市泉町1丁目3番10号 TEL 06-6384-1231
発行年月日	平成24(2012)年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 度数	東経 度数	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
吉志部瓦窯跡	吹田市岸部 北4丁目 1388番1他	27205	38	34° 47' 2"	135° 31' 53"	20080303 ～ 20080331	122.7m <sup>2</sup>	史跡整備に 係る確認調 査及び史跡 整備時確認 瓦の報告
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
吉志部瓦窯跡	生産遺跡	平安		窯(平窯10基、窑窯4基)、瓦 溝				

# 吉志部瓦窯跡

-出土瓦整理報告書-

平成24(2012)年3月31日

編集 吹田市教育委員会

発行 吹田市泉町1丁目3番40号

この報告書は300部作成し、一部当たりの単価は693円です。



